東京大学トライリンガルプログラム・中国語

2021年度南京サマースクール報告書

全体日程

8月9日	中国語授業４コマ	始業式　南京大学校内見学
8月10日	中国語授業４コマ	南京大学学生との交流
8月11日	中国語授業４コマ	太極拳
8月12日	中国語授業４コマ	中国語講演１
8月13日	中国語授業４コマ	南京大学学生との交流
8月16日	中国語授業４コマ	南京大学学生との交流
8月17日	中国語授業４コマ	
8月18日	中国語授業４コマ	太極拳
8月19日	中国語授業４コマ	中国語講演２
8月20日	中国語授業４コマ	南京大学学生との交流
8月23日	中国語授業４コマ	南京大学学生との交流
8月24日	中国語授業４コマ	
8月25日	中国語授業４コマ	太極拳
8月26日	中国語授業４コマ	中国語講演３
8月27日	中国語授業４コマ	南京大学学生との交流　修了式
9月10日	反省会	

目次

中国語サマースクール開講の辞　朱小易 1
1.　南京大学学生との中国語での交流
1.1　一班 5
1.2　二班 10
2.中国語講演
2.1中国語講演1「中国の社会的弱者―社会的支援と教育」
南京大学社会学院・賀暁星教授 12
2.2中国語講演2「中国経済」
南京海外教育学院・陳志紅副教授 14
2.3中国語講演3「南京の歴史・文化と南京博物院の紹介」
南京田家炳高級中学・施江副校長 17
3.中国語授業担当教員(南京大学)からのコメント
3.1李宇晨(１班教員) 20
3.2王大瑩(１班教員) 21
3.3杭蕾(２班教員) 22
3.4汪天源(２班教員) 24
4.参加学生の感想
4.1「人は城、人は石垣、人は堀」紅 優成 25
4.2「南京サマースクールの感想」長浜 駿斗 27
4.3「刺激と発見に満ちた南京」吉田 優太 28
4.4「真夏の東京から、南京へ」浅野 皓生 29
4.5「次への一歩」川戸 健太竜 32
4.6「参加しなければ得られないもの」小久保 龍之介 33
4.7「南京研修の感想」小林 透子 34
4.8「感覚怎么样？」加藤 雅生 35
4.9「三週間での急成長」松村 実紗 38
4.10「南京研修で得られた学び」周 友佳 39
4.11「三週間を振り返って」揚原 聖智 40
4.12「楽しく学んだ3週間」細谷　辰彦 42
5.　反省会
オンライン反省会記録 44
おわりに
極少人数オンライン中国語サマースクール　伊藤 徳也 68

中国語サマースクール開講の辞

南京大学海外教育学院副院長 朱小易

（開講式・8月9日）

先生方、生徒の皆さん、

こんにちは。

また新たに東京大学のサマースクールの参加者の皆さんとお会いできて大変嬉しく存じます。昨年と同様、今年もやはりこの特殊な方式を以ってオンラインでお会いすることとなりました。南京大学を代表して先生方と学生の皆さんを心より歓迎申し上げます。

学生の皆さんは去年と同様、結局南京や南京大学を訪れられなかったことを我々と同じように心の中では残念に思っているかもしれません。しかし、今の状況はとても幸運でもあるのです。すなわち、私たちが今生きている時代がとても恵まれているといえるからです。実際特殊な方式を以ってサマースクールを継続し、学習し続けられており、中断にも至っておりません。もし私や伊藤先生、鄧先生が若かった頃であれば、この方式は想像しがたく、実現などできなかったでありましょう。去年のパンデミック以来依然として東京大学の学生は南京へ来ることができずにいます。そのような中、南京と東京双方の先生方は、サマースクールを中断させぬよう大変な努力を払ってまいりました。この三週間のオンラインコースも双方の大学の熟考と計画を以って実現するに至ったのです。

本スクールでは毎日の中国語の授業の他に、中国の社会や経済、文化といった皆さんが興味を持っている問題について毎週一回、南京大学から教授をお呼びし、講座を開いていただきます。この際に皆さんには何か成果が得られることを期待しております。この他にも南京大学の学生や中国の高校生との交流の機会もご用意しております。

昨日は丁度東京オリンピックが円満に終結しましたね。一方で心の中では実際に東京に見に行けなかったこと大変残念にも思います。生徒の皆さんの中にはボランティアとしてオリンピックに携わった人もいるの

でしょうか。ぜひその素晴らしい経験を学生交流の中で共有していただけたらと思います。

東京大学の学生の皆さんはこれまで大変な努力をして学習をしてきたことと思います。私たちもこのプログラムを長年続け、両大学にとって非常に重要なイベントとなっています。パンデミックの中でもこのプログラムを続けてきています。またこのプログラムは大学間の夏休みの短期プログラムのうち唯一続けることができているものでもあり、これには我々がいかにこのプログラムを重視し努力してきたかが反映されているのではないでしょうか。そのため、私はこの機会を借りて、東京大学と南京大学のこのプログラムに参加してくださった先生方や学生の皆様に心より感謝申し上げたいと思います。皆さんの努力無しには今日という日はなく、このような成果を残すことはできなかったとおもいます。

きっとオンラインでの学習は実際にその間に身を置き学習するのと多かれ少なかれ違いがあり、またその中でもオンラインなりの長所があると思います。そのため学生の皆さんには是非この良いチャンスをものにして勉強に励んでいただきたいと思います。

皆さんはこれですべき努力をしてきましたから、きっと南京大学に来ることのできない状況でも良い学習効果を期待することができるでしょう。

最後になりましたが、早くコロナも終息し、来年のこの時期には東大の学生も南京にきて学習ができるようになることを願います。もちろん、南京に来ることが叶わなかった学生の皆さんも自由に両国を行き来できるようになりましたら、南京や南京大学にいらしましたら、心からの熱意を込めて皆さんを歓迎いたします。また各々の学生の勉強が順調にいくことを祈っております。ありがとうございました。

（日本語訳：吉田優太）

始業式/南京大学オンライン見学の様子　撮影：王文欣

南京大学の教室と校内の様子　撮影：王文欣

活動報告

1. 南京大学学生との中国語での交流

1.1　一班

加藤 雅生

第一班では、一回目から四回目までの内容を南京大学の学生が企画してくださり、最後の五、六回目の内容を東京大学の参加者たちが企画した。以下に内容を簡単にまとめてみた。

一回目

自己紹介を兼ね二つレクリエーションを行った。一つ目は、自分の好きなものを三つ紹介するが、そのうち一つは嘘であり、発表者はどれが嘘か当ててもらう、というものであった。次に、自分しか経験したことのないような体験を共有し、同様な体験をしたことがある聞き手は「俺也一样！」と言って挙手し、一番手が上がらなかった人が勝ち、というゲームをした。この「俺也一样！」というのは、中国の三国志演義のドラマの中で張飛が関羽に同調するときに放ったセリフであり、中国国内でネットの流行語になったものである。一回目の交流会ということで、互いに若干緊張しているようであったが、会が進むにつれ打ち解け合うことができた。

二回目

恋愛観について日本と中国の学生の感じ方を共有した。南京大学の学生は積極的に自身の経験を共有してくれたため、ある程度の盛り上がりを見せたが、東京大学の参加者は自分を含めややシャイであり、自らの経験を自分から共有するといったことはあまりなかった。この恋愛に対するオープンさの違いも文化の違いなのかもしれない...

三回目

自分が行ったことがある場所を絵を描いて当ててもらうゲームをした。三回目になってくるとだいぶ相手のことが分かってくるようになり、お互い冗談を言い合ったり、一緒に笑うような場面が増えたように感じられた。

四回目

将来の夢について各自共有し、その場に居合わせた李彦銘先生から両大学の学生は助言をもらった。東京大学の参加者の数名がジェンダーに関する法や婚姻法に興味があったため、中国国内の事情について話題が及んだ。比較的幅広い分野のトピックについて話し合う良い機会となった。

五回目

ワードウルフというゲームを企画した。このゲームでは参加者の中で一人一人AかBの異なるテーマが与えられそれについて各人の話を聞き、誰がAのテーマを与えられているのか、誰がBのテーマを与えられているのかを判定するというゲームである。このゲームは楽しみながらも中国語の理解度が試される非常に良いゲームであった。

六回目

ピクトセンスというゲームを企画した。中国にも你画我猜という同様のゲームがあるそうで、両参加者とも慣れた様子でUmeetのホワイトボードを用いて絵を描いた。また、ゲーム中に南京大学の学生が私たちに歌を披露してくれた。そのお返しとして（？）最後別れ際に東京大学の参加者も各自一芸披露した。まず紅がモノマネを披露して先陣を切り、加藤と浅野は結業式に続いて（懲りもせずに）「小苹果」を歌い、小林は甘い歌を披露した。そして周は中国語の早口言葉を披露し、吉田は愛猫を皆に披露した。

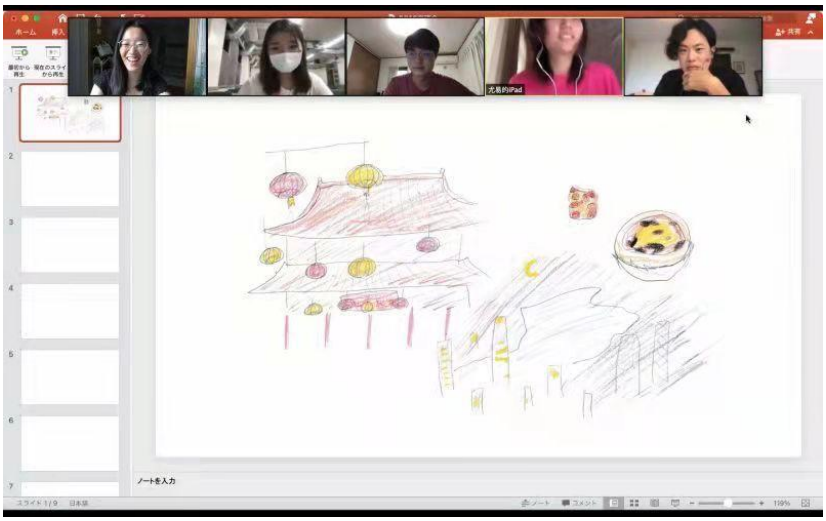
以上が交流の概要である。南京大学の学生は私たちのために丹念に準備をしてくださった。また、語学的なサポートもしてくださり、交流中に難しいであろうと思われる単語をチャットボックスに送ってくれたり、日本語を勉強している学生が日本語訳を教えてくれたりなど、懇切丁寧

であった。参加者の数名が話を理解できていない時も急かしたりせず、わかりやすい表現で言い直してくれたりなど、思いやりに溢れていた。この交流会を愉快に楽しめたのは南京大学の学生たちのおかげであり、感謝の言葉に尽きる。また、学生たちとは交流会途中からWeChatで繋がりを持っており、別れ際にはお互い名残を惜しみ、「今度南京に来たら連絡してね」、「こちらこそもし日本に来ることがあれば歓迎するよ」といった温かいメッセージが交わされた。朋友たちに再会する日を楽しみにしている。

１班交流会の様子　撮影：王玨婷

壹
古代建筑纪录片-《中国微名片-世界遗产》
CCTV 9
纪 录
土楼变成一个向外开放的地方
https://tv.cctv.com/2021/07/25/VIDEsAs35Y5PhPcjvmD6AF7A210725.shtml
葛家宁
尤易的iPad

安藤忠雄在中国的设计作品
上海保利大剧院
杭州良渚文化艺术中心



建筑
Landmark
美食
Boracay Sands Hotel
您已被静音，按Shift + Command + A取消静音，或按住SPACE键暂时取消静音。

第三次交流会
——漫游
葛家宁 カツ　カネイ
魏淑阳 ギ　シュクヨウ
南京大学海外教育学院
2021. 8. 16

1.2　二班

細谷 辰彦

全6回の交流会のうち、1-3回は南大生から、4-6回は東大生から企画を用意した。東大生6名、南京大生6名で実施した。

1回目は、南大生と東大生で互いに打ち解け合いながら、学生生活や、週末の過ごし方を話すことができた。故郷の紹介や東京で遊ぶ場所、アイドルなどの話題では、それぞれの意見を聞くことができ、大いに盛り上がった。質問コーナーでは、大学卒業後の進路や大学受験について東大生から質問し、南京大の学生たちから率直な意見を聞くことができた。

2回目は、互いについて理解を深め、お金を何に使っているかなどの話題で楽しんだ。将来にむけた考え方なども聞かれた。

3回目は、自分の3年後の生活を発表した。将来の生活を想像して、本をつくり、見せ合った。本については、絵をたくさん描いたり、細かく説明を入れたりと、各自、思い思いに発表しており、キャリアプランをうかがうことができた。

4回目は、日本と中国の習い事や冠婚葬祭の違い、共通点について話し合った。幼少期の習い事については、それぞれの経験を踏まえて、意見交換した。また、日本のことわざを題材にしたクイズを楽しんだ。

5回目は、世界遺産紹介を実施した。クイズ形式で、日本の世界遺産について問題を出すと、質問も様々に寄せられ、学びの機会になった。東大生への質問コーナーでは、南京大学生から、東大の専門課程の選択の仕組みや志望動機について、質問が寄せられた。また、ホットな学問領域についても、意見交換した。

最後となる6回目は、東大のキャンパスツアーをした。実際に駒場キャンパスと本郷キャンパスを巡りながら、案内をすると、南京大の学生たちからは、学食・キャンパスの様子や、学校内の博物館、銀杏木などについて、多種多様な質問が寄せられた。東大生から、キャンパスライフについての本音が語られると、また南京大との共通点や相違点を発見することができた。東大と南京大のキャンパスの違いについては、双方向で質問や疑問が投げかけられ、各々の大学の特色を理解することができた。

（みんなで同じポーズ　撮影：王文欣）

（最終回キャンパスツアーの様子　撮影：王文欣）

2. 中国語講演

2.1中国語講演1「中国の社会的弱者―社会的支援と教育」

南京大学社会学院・賀暁星教授

小林 透子

［概要］

賀暁星先生に、「中国的弱势群体 社会支持与教育」という題でご講演いただいた。先生によれば、中国における貧富の差は大きく、社会的弱者の人口が全体の人口の11-14%にものぼるという。今回の講演では、その中で障害者、特に聴覚障害者についてのお話を伺った。

中国の障害者8500万人のうち、聴覚障害者は2075万人に及ぶ。障害者の支援団体や、聾学校での教育を通じて支援が行われており、それらを通じて「聋人（聴覚障害者）」が「听人（聞こえる人々）」の社会に溶け込むことが目指されている。

今回の講演では、特に聴覚障害者の教育に焦点が当てられ、聴覚障害者教育における4つの問題点についてお話がされた。

一つ目は、聾学校における授業と、普通学級における授業の差についてである。普通学級では、授業時間を丸々、特定の教科における新たな知識の習得に用いることができる。しかしながら、聾学校ではその教科で学習する単語、表現の発音の方法や読唇術も学ばなければならない。これにより同一学年でも聾学校での進度に遅れが生じてしまう。そのため、聴覚障害者が上位の大学へ進学するのは非常に難しい。

二つ目は、聴覚障害者が手話ニュースを理解することができないと言う問題である。手話ニュースで用いられているのは「人口手話」であり、健常者が話す語順（中国語の主語・動詞・目的語の順）で組み立てられている。また、その語順の通りに単語一つ一つを手話で表す。例えば、「一边开车一边喝水」（運転しながら水を飲む）」であれば「一边/开车/一边/喝水」のように分割した要素を並べる。その一方で、聴覚障害者が一般に使用する「自然手話」は主語→目的語→動詞のように見る順番に沿った語順で組み立てられる。また、運転の動作をしながら水を飲む動作をする、と言うように同時間に一つの動作をすることで完結

する場合が多い。これにより、手話ニュースで用いられる人口手話が聴覚障害者に理解されないと言う問題が起こっているのである。

三つ目は、聴覚障害を持つ教師の地位の問題である。聾学校の中すら聴覚障害を持つ教師の数は少ない。意思疎通の側面では健常者に比べ優位にあるが、生徒の成績を上げ良い学校に合格させる、という専門性の面で健常者に劣るためである。

四つ目は文化と認知の問題である。2つ目で挙げたように、言語の構造が異なる他、認知においても健常者との差異が見られる。聴覚障害者は様々な事象に因果関係を見出してしまいがちであると言う。例えば、聴覚障害者がお金を拾い、先生に渡すとする。後日先生が麺を食べているのを見て、その先生が彼/彼女から受け取ったお金を使って麺を食べているのだと思い込む、といったことである。

このような差異がある中で、聴覚障害者の地位をあげるにはどうすればいいのだろうか。それには、聴覚障害者への同情を超えて、彼らを尊重することが不可欠であり、そのためには「听人」が手話をはじめとした彼らの文化の魅力を知ることが重要である。例えば、自然手話には動作のみによって表されると言う他の言語とは異なった魅力があり、視覚を元に作られているため国籍が違っても通じ合えると言う「世界言語」としての可能性を秘めている。公務員志望の学生に手話学習を課せば、言語としての重要性も上昇するだろう。これらの方法により、聴覚障害者が社会に溶け込むことができるようになるだろう。

［感想］

中国国内にとどまらず聴覚障害者についてほとんど知識がなかったため、非常に興味深く感じた。特に耳の聞こえる一般の健常者を「健常者」としてではなく「听人」として相対化する視点は、聴覚障害者が対等な立場で社会に溶け込む上で大切なことであると感じた。賀先生によれば、これらの聴覚障害者に関する授業が大学でも取り入れられている、とのことであるが、東大でそのような授業は見聞きしたことがない（ただ単に関心がなく、見逃しているだけであると言う可能性もある）。社会的弱者に対する取り組みや政策を日中で比較し学ぶことは非常に有意義であると感じた。

2.2中国語講演2「中国経済」

南京海外教育学院・陳志紅副教授

小久保 龍之介

・講演の概略

8月19日、北京時間の14時から16時までの時間に中国経済についての講演が行われた。一週間前の教育についての講演に引き続き現在進行形の内容を扱っており、今まさにどのような状態であるかをうかがえる貴重な機会であった。

・講演の内容

講演を始めるにあたり、教授の方から東大の学生に対して「中国経済と聞いて思い浮かぶのはなにか」という質問が投げかけられた。数名の生徒からチャットを通じて「計画経済」や「規模の大きさ」をはじめとする様々な回答があった。そうした内容についての簡単な受け答えがあった後、経済という単語についての説明がなされた。「経」という字がビジネスの事情や活動を指し、「済」という字が救済するという動詞であること、そして経世済民というワードが提示され、一度は聞いたことのある経済の基本に立ち返った。

本編は二部構成となっており、まずは2020年の中国経済というテーマが扱われた。

中国経済は、その巨大な人口からわかるように規模が大きく、世界での存在感も日増しに強まっている。ただ、経済発展が直ちに国の増長につながらないのが難しいところである。経済的に資本主義をとる中国では経済の発展に伴う格差の広がり、不均衡な構造の拡大がみられ、国としての豊かさと人々の生活水準の推移とのつながりが直線的ではない。こうした現状から、持続可能な発展の重要性がうかがわれた。

一方、コロナショックによる世界的不況下における中国の復活は世界をけん引するものであった。1月から3月にかけての経済成長率は、コロ

ナ蔓延初期に中国が甚大な被害を受けていたせいもあり-6.8%を記録した。しかし4月から6月にかけての経済成長率は3.2%と、まさしくＶ字回復を遂げている。この時期は世界各国で感染が拡大し経済に大きなダメージを与えていたことを考えると、驚異的な数字であった。

中国経済の現状を俯瞰する際に、講演内では就職、金融、貿易、外資など6つの安定と国民の就職、基本的生活、市場主義、食物と資源の安全など6つの保証という形でカテゴリー分けされ、それらのいくつかについて説明があった。

まず就職について、そもそもの人口が多く労働力は豊富であることが前提として挙げられた。ただ、生活水準のゆるやかな向上による賃金の上昇や技術を学ばせるための教育にかかるコスト増加などにより、賃金の低い東南アジア諸国へ工場などが移転しているのが現状である。

人々の基本的生活については、二元経済を推し進めたことで都市部と農村部にギャップが生じていることがあげられた。その是正措置として、計画経済の推進、都市化（城鎮化）、新農村の建設などが進められている。

食物の生産についても触れられた。広大な国土と莫大な人口を有する中国は、農業に注力してきた。しかし、経済発展に伴う経済構造のシフトにより(中国はつい最近第三次産業型社会への移行がなされた)、前述した都市部との格差が生じ、三農問題(農村問題、農業問題、農民問題)として深刻な状況となってきている。

資源の問題としては、やはり環境保護との兼ね合いが主要なテーマとしてあげられる。環境保全の問題は2030年ごろにピークを迎えるとされ、新エネルギーを使った発電の本格化が急務である一方、既存の工場におけるCO２排出の改善が難しいことなど、課題は山積した状態である。

貿易について注目するのは、解放と保護のバランスである。国際的な貿易の理念は存在するものの、その判断は各国にゆだねられる部分が多く、アメリカの政策転換を見れば明らかなように国による解放と保護の段階差が取引を難しくしている。中国は無差別な解放を標榜しているが、今後の推移は国際情勢の状況次第である。

講演の終盤には、第二のテーマである中国の経済発展の展望について説明していただいた。経済で重要なものの見方である「需要」と「供給」で考えると、現在中国は供給過多であるようだ。需要と供給の国際的な

循環だけでなく国内の循環を考えるとき、まず供給者側が効率の改善など改革をするのがよいといえる。

また、RCEPという広域的な自由貿易協定についても解説していただいた。中国、日本、インド、韓国、オーストラリアといったアジアとオセアニアの諸国からなる、圧倒的人口と巨大な貿易規模を有し大きな発展のポテンシャルをもつこの経済的枠組みにおいて、中国は中心的存在になることに疑いの余地はない。TPPに代わり注目を集めるこの自由貿易圏の趨勢は、全世界に影響を与える。

以上の講演が終わった後、質疑応答の時間を設けていただき、セッションが終了した。

・感想

発展のすさまじい中国における経済の動向には大変興味があったが、スケールが大きく講演前は漠然としたイメージしかもっていなかった。講演では就職や資源、貿易といった各テーマについて個別に具体的な説明を聞くことができ、中国経済の正確な像をつかむのに大きな助けとなった。規模は違えど日本と似ている部分も多く、発展段階や直面する(している)課題の国を超えた類似性もうかがい知ることができ、非常に貴重な体験となった。

2.3中国語講演3「南京の歴史・文化と南京博物院の紹介」

南京田家炳高級中学・施江副校長

長濱 駿斗

古都・南京

南京は江蘇省の省都、長江下流に位置する街で、人口は850万人である。歴史上多くの王朝の都が置かれ、西安、北京、洛陽と並び、中国の『四大古都』と称されている。また、三国時代の229年に呉の孫権が都（当時の建康）を築いて以来中華民国に至るまで10の政権の都となり、『十朝都会』と呼ばれることもある。なぜ多くの都が置かれたかについては、その立地が大きく関係している。中国は古くから北方の騎馬民族に苦しめられ、華北は幾度となくその支配下に置かれた。騎馬民族は陸戦ではめっぽう強いが水上での戦いにはあまり強くない。そのため漢族は長江の南に逃れ、そこを防衛ラインとした。そして、北伐の機会を伺ってきたのである。

南京の歴史

講義は歴史の流れに沿う形で行われた。よって、本項でも時系列に沿って紹介していく。

35万年前	湯山原人の化石発掘	
5～6千年前	北陰陽菅遺跡	原始的な村落
前495年	冶城	春秋戦国時代、呉の時代に造営
229年	孫権、建康に遷都	東呉（三国時代）

この時代石頭城などの防衛施設が築かれる
また、邪馬台国との交流も行われた

317年	晋の司馬睿、建康に遷都	東晋の成立
～589年	南朝	東晋、宋、斉、梁、陳

この頃建康の人口は百万を超え、ローマとともに世界の最大都市の１つであった
東晋時代は文化活動が盛んになり、顧愷之、王羲之などの歴史に残る偉大な文化人も多数生まれた
また、宋には倭の五王がたびたび朝貢を行った
梁の時代には南京を代表する鶏鳴寺が建立され、この頃の中国仏教の中心となった

937～975年	南唐	欽陵地宮、韓熙戴夜宴図
1368年	明建国	初代皇帝：朱元璋

世界遺産である明城壁は全長29.5kmに渡り、現存する世界一の城壁である
建築には２０万戸もの人員を動員し、３億５千万個もの石が使われた

1912年	中華民国成立	臨時大総統：孫文

南京市街からほど近いところにある中山陵は孫文の墓所である

1937年	日本軍、南京侵攻	日中戦争中

南京市内には南京大虐殺記念館がある

世界文学の都・南京

2004年、ユネスコは創造都市ネットワークを成立させ、その中の『文学の都』には南京を含め世界の20都市が選定された。南京の文学の歴史は1800年余りに及ぶ。
６世紀、梁の昭明太子が編纂した昭明文選に始まり、李白の詩、南宋時代の王安石、清代の儒林外史、紅楼夢など多くの作品が残された。

南京の風俗

秦淮灯会は市内全域を舞台に開催されるお祭りで、中国において期間最大、参加人数で、規模も最大の民俗灯会である。

南京博物院

南京博物院は北京の故宮博物院に次ぐ中国第二の博物館であり、1933年に開院された。竹林七賢の壁画や坤輿万国全図といった貴重な歴史文物を収蔵している。

敷地は非常に広大で、歴史館、民国館、特展館、非遺館、技術館、数字館など多くの建物を有している。

また、南京田家炳高中は南京博物院と提携しており、学生が博物院において案内のボランティアを行っている。また、南京博物院の収蔵品を活かして研究を行い、論文発表も行っている。

（南京博物院展示室　南京博物院HPより）

3. 中国語授業担当教員（南京大学）からのコメント

3.1李宇晨（１班教員）

東京大学の学生のみなさんへ

時間が過ぎるのは速いもので、あっという間に3週間のサマースクールが終わってしまいましたが、皆さんは先生に深い印象を与えてくれました。

小林透子さんは授業で積極的に考え、発言をしてくれました。反応も素早く、中国語も流暢で、しかも笑顔が素敵で、とても影響力のある学生でした。加藤雅生くんの発表は非常によく準備されており、文法に関する基礎知識もすばらしいものでした。また、中国語の話し方もとても自然でした。紅優成くんは言語体系と表現力が抜きん出ており、しかも発音が非常に標準的で、独創性も優れていました。浅野くんはきわめて高い言語学習能力を持っています。豊富な語彙をたくわえており、しかも新しい知識を活用するのが非常に上手でした。吉田優太くんは学習の姿勢が端正であり、授業の課題には少しも抜かりがありませんでした。グループ学習に長けていて、会話の進歩もとても速く、すばらしいです。周友佳さんは、たしかに中国にルーツを持ち、優れた中国語の土台が既にありましたが、それでも真剣に学習に取り組んでくれました。これは賞賛に値することです。

さいごに、みなさんの学習の進歩と健康をお祈りします。みなさんといつか南京大学で集まる機会がありますように！

（日本語訳：紅 優成）

3.2王大瑩（１班教員）

幸運なことに、今年もまた東京大学の学生と3週間ともに学習することになりました。この3週間は愉快で充実しており、また、楽しく幸せなものでした。

毎回の授業冒頭でのプレゼンを通して、社会生活など様々な分野に対するみなさんの深い考え、文学作品に対するみなさんの深い理解を知ることができました。集中して授業を受ける姿勢と時間通りに提出された宿題から、みなさんの自律、努力を見ることができました。また、社会問題や歴史問題の討論ではみなさんが社会への強い責任感と使命感を持っているのが感じられました。さらに、最後のパフォーマンスには若者特有の生き生きとした勢い、楽観的なユーモア、熱心な進歩が表現されていたように思います。みなさんとの学習は驚きと喜びに満ちたものでした。そして、みなさんからは優秀な人がさらに真剣に努力する様子を見ることができました。

また、授業ではみんなが中国をより良く理解しようと強く望んでいることがしっかり伝わってきました。引き続き中国語を勉強し、機会があれば中国に来て勉強したり旅行したりして本物の中国を味わってほしいです。さらに、みんなが自分の夢を叶え、心にしっかりとした自我を備え、もっと大きな目標を立てて、将来は日中の文化交流の橋渡しとして貢献し、日中友好という大事業のために力を捧げることを望みます。さいごに、みんなに次の言葉を贈ります！「長風浪を破るに會ず時有り。直に雲帆を挂けて滄海を濟らん（長風が荒波を突き破る時はきっと来る。そのときは直ちに船に帆を揚げてこの海原を渡ろう）」。

（日本語訳：紅 優成）

3.3杭蕾（２班教員）

時が経つのは早いものです。　あっという間に3週間のショートコースが終了しました。　東京大学のショートコースに参加するのは2回目ですが、東京大学の仲間と一緒に勉強したり、議論したり、向上したりできるのはとても気持ちがいいので、今でもとても興奮していて幸せです。

今回は、総合クラスの2クラス目を担当し、6人の生徒と一緒に中国語を勉強していました。　最初は知らない人同士で恥ずかしかったのですが、徐々に仲良くなっていきました。　クラスのみんなはとてもフレンドリーで丁寧で、とても協力的で理解があり、彼らの協力のおかげで私たちのレッスンはいつもとてもスムーズに進みました。　教室では、中国語の知識の交流の他に、文化の交流も行われました。　私たちの関係は、友人に近いものです。　東京大学の学生たちは、常に実践的で真面目に勉強しており、私が出した課題を時間通りに高いクオリティでこなし、私を驚かせてくれました。また、言葉の壁があるために自分の考えやアイデアをすべて表現できないこともありましたが、一生懸命に話したり見せたりしており、挫折を恐れませんでした。　間違いを恐れず、不安を抱かず、勇気を持って自分を表現することで、言語能力が確実に向上することを実感させてくれました。　これは、私が彼らから学んだことです。　また、彼らの成長を肌で感じることができました。　また、彼らは非常に質問好きで、その質問が私のためになることもあります。私たちがどうやって向上し続けるかというと、常に質問をして疑問を持つことで、学んでいることに感銘を受けるようになります。

この3週間一緒に過ごしたことで、お互いに強い絆が生まれました。顔を合わせて知り合うことができなかったのは非常に残念でしたが、今日の技術を駆使して心理的な距離を縮めることができました。　また、このコースを通じて、東京の学生と一緒に日本文化について多くのことを学び、私自身の知識ベースを豊かにし、中国と日本の文化の違いや共通点について理解を深めました。　私の生徒たちは親切で、勉強だけでなく、社会のことも気にかけています。社会の美しさを知り、社会の問

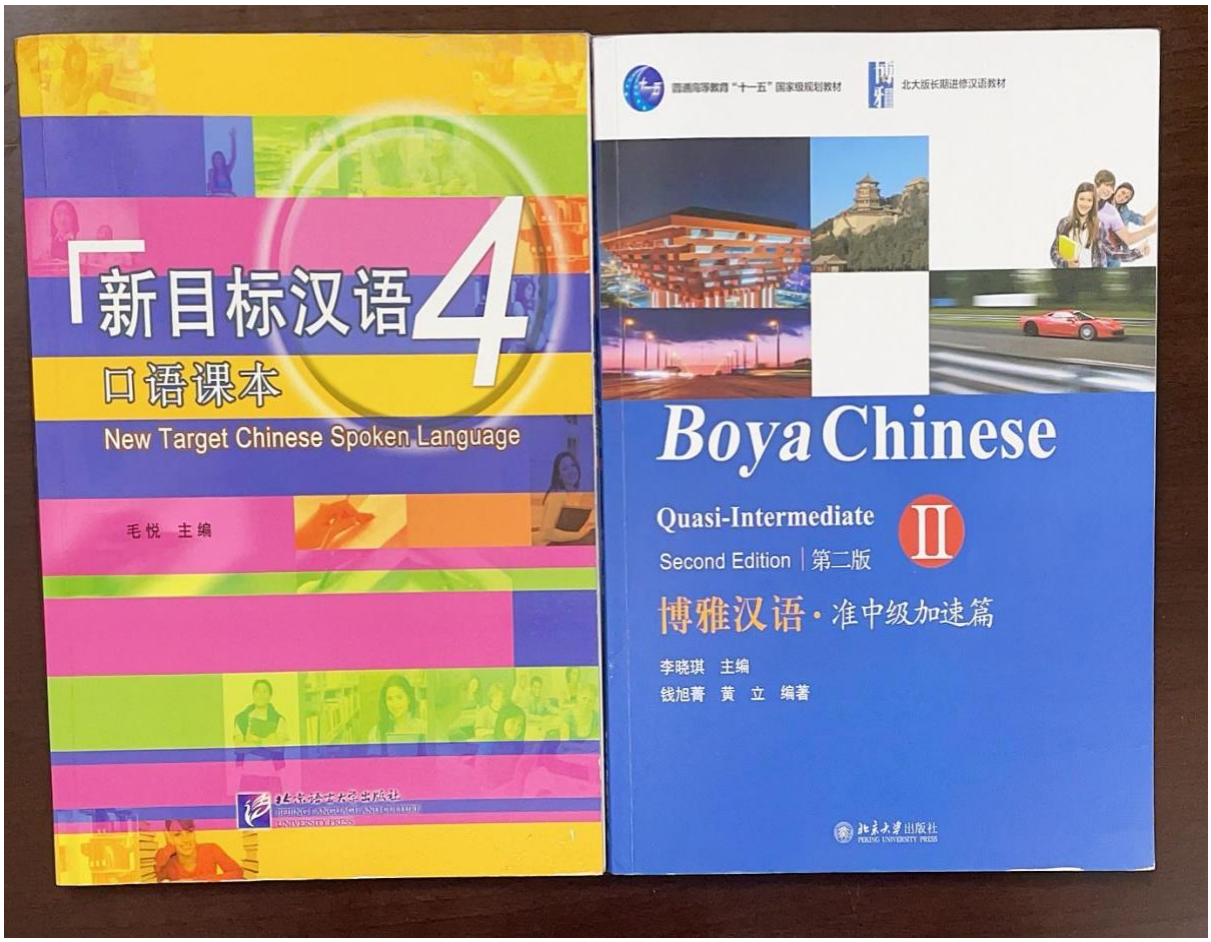
題を知り、解決策を見つけるために常に考えています。私は彼らに社会的責任を感じており、それはとても価値のあることだと思います。　これは、私が彼らから学んだ貴重な知識です。

「花が好きなら庭師になれ、好きなことがあるならそれをやれ。　恐怖を恐れず、比較せず、ただ愛を持つこと。」　世の中には自分の力ではどうにもならないことがたくさんありますが、世界にも私たちにも無限の可能性があります。だから自分を制限しないで、勇気を持って自分の輝く夢を追いかけましょう！それがあなたであれば、きっと可能になるはずです。そして、いつもあなたの幸せを願っています。

皆さんの明るい未来を願っています。

近いうちに南京でお会いできることを楽しみにしています。

（日本語訳：松村 実紗）



（今年の教材。撮影：吉田優太）

3.4汪天源（２班教員）

東京大学のサマープログラムに参加できたことを大変光栄に思います。1ヶ月間のプログラムでは、学生のスピーキング講師を務め、中国語を学ぼうとする学生の熱意と決意を感じました。

授業が始まる時間は早かったですが、みんな時間通りに授業にきていました。しかし、学生たちは困難を乗り越えて協力し合い、特にグループディスカッションでは、いつも先生に嬉しい驚きを与えてくれましたし、ディスカッションの後のプレゼンテーションも素晴らしく、学生たちが真剣に勉強している様子が伝わってきました。彼らは毎日遅くまで勉強し、先生のアドバイスに応じて、音声の発音や文法を改善し続けました。　私は、この留学を通して、学生の発音を大きく改善できたと信じています。

東京大学のプログラムは、南京大学にとって常に質の高い語学プログラムです。　東京大学の学生は、非常に勤勉で聡明であり、常に先生方から高く評価され、愛されています。この研究の後、学生たちは、中国への理解を深め、中国語能力を向上させ、将来的にも向上し、卓越した能力を発揮することができると信じています。

（日本語訳：松村 実紗）

4. 参加学生の感想

4.1「人は城、人は石垣、人は堀」

紅優成

応募開始時、私は迷っていた。生の体験を欠いたオンライン授業のために、貴重な夏休みの3週間を割いて良いのか。今となっては、それは全く無用の心配であった。この3週間は、私の中国語学習史上最も素晴らしい体験となった。

授業と交流会に分けて記述したい。今年のサマースクールは定員割れし、授業は1クラス6名とかなり少人数で行われた。当初、私は、こんな少人数で果たして自分のモチベーションを継続させることができるのかどうか心配していた。しかし、この少人数が逆に良かった。かなり良かった。少人数クラスでは、とにかく発言がしやすかった。クラスメートも皆積極的に発言し、そこには失敗を恐れない雰囲気があった。そうした雰囲気のおかげで授業を通してクラスメートのことについて知ることができた。私にはサマースクールでほぼ初対面のクラスメートもいたが、数日のうちに仲良くなった（と思う）。彼らは非常にノリが良く、このような気の置けない仲間がいるという環境は、高校を卒業して以来なかなか得難いものだった。今回の体験はオンラインではあったものの、コロナ禍での大学生活で欠けていたことを多少なりとも提供してくれた。そんなわけで、私は仲間達との授業を大いに楽しんだのだった。

また、授業の内容自体も期待を裏切らないものだった。教科書は難易度がちょうどよく、各単元から多くの単語・文法ポイントを学べた。また、サマースクールの特点はやはり学んだそれらの知識をすぐに練習できたということである。そのような機会は非常に多くあった。先生は毎回課題を用意した上で、さらに、授業中みんなに質問をした。この質問は全体に向けられることもあれば、個々の学生を指名することもあった。また、後述する南京大生との交流においてももちろん練習することができた。一度「非…不可（…せざるをえない）」という表現を交流会で使ったところ、かたい表現だったからか、笑いが起きた。このような実際

の中国語の温度感も学ぶことができた。先生方は非常に熱心で、フレンドリーで、とても充実した授業であった。

南京大の学生との交流会もすばらしいものだった。彼女たちは交流会の準備を万全に行ってくれて、そこにはおもてなし精神が感じられた。開会式の時、南京大生がライブ中継でキャンパス内を案内してくれた。少し事案が異なるかもしれないが、私は最初、思わず当時ニュースになっていた「オンライン修学旅行」を連想した。このニュースに対して私は批判的な感情を持っていたのだが、彼女らの案内に対して、私はちっともマイナスな感情を抱かなかった。「なんとか生に近い体験を東大生にさせてあげよう」。その心遣いが嬉しかった。彼女らもフレンドリーで、ホストとして東大生の話をよく聞いてくれた。一度交流会で福建土楼を紹介してくれた時があったが、その際、私は意見を尋ねられた。かつて私は福建省に住んでいたことがあるのだが、彼女らは私の初日の自己紹介を覚えてくれていたのだ。これには感動した。

間違いなく、今回のサマースクールに参加してよかった。このような機会を与えてくれた東大の先生方、南京大の先生方、フレンドリーにもてなしてくれた南京大の学生方、積極的な学習仲間となってくれた東大のみんなには感謝しかない。これからもよろしくお願いします。さいごに、来年度には南京サマースクールがオフラインで開催できることを祈って筆を置く。

（南京大学校内　撮影：撮影：王文欣）

4.2「南京サマースクールの感想」

長浜 駿斗

始まる前は完全オンラインということでかなりの不安があった。そもそも同じ班の人もあまり知らないし、ある程度孤独感を感じていて、これを3週間は厳しいな、と思っていた。

今回のプログラムでとても良かったことは、オンラインながらも人との交流がかなりできたということだ。

口語課において先生と会話したりブレイクアウトルームで他の班員との交流をできたり、共に課題をやっていくなかでかなり仲良くなれた。そして、特に貴重な体験となったのは南京大の大学生との交流だった。私は中国への渡航歴がないため、中国に関する情報というと外国とネット回線が遮断されている以上、報道機関のニュースや、知り合いの日本に住む中国人等、日本のフィルターを通したものが主となる。その点で、彼ら彼女らと話したり、キャンパスのバーチャルツアーによって、中国人の生活や趣向が窺い知れたことは大きかった。また、無論だが友達ができたことが一番嬉しかった。

これらを経て、オンラインでも意外といろいろなことができることに気づき、オンライン授業が好きになれた気がする。

一方で今までの甘い中国語学習のツケだが、とくにリスニング面が弱く、会話しようにも相手が何を言っているのかわからないことが少なからずあった。これをモチベーションの足掛かりとして、リスニングを自分で練習しつつ、知り合いの中国人に会話の練習を頼み、国内にいながらも総合的なレベルアップをしていこうと思う。そして、いつか南京に行って、南京の方々に会い、本当の暑期班を実現したい。

4.3「刺激と発見に満ちた南京」

吉田 優太

今回の南京研修は私の中国語学習にとって大きな刺激となり、目指すべき目標を知る良い機会にもなりました。

口语と综合の授業では、新しい単語や文法事項を学ぶことができただけでなく、プレゼンテーションや動画の内容の説明といった中国語の運用能力も鍛えることができました。加えてなにより先生お二方とも熟練していて、優しく熱心に教えてくださり、私自身も自然体で楽しく授業を受けることができました。また同じ班のメンバーからも、その学習の姿勢や中国語のレベルの高さといった点で多く刺激を受けました。彼らと共に勉強ができたことも南京研修に参加してよかったと思える理由の一つです。

午後のプログラムもどれも魅力的で、楽しみながら中国という国への理解を深めることができました。特に南京大の学生との交流はリアルな中国語に触れることができただけでなく、中国の方と中国語で会話ができることの嬉しさも知ることができました。また各講座では最初「まだ中国語を学習中の僕が“中国語で”学ぶのなど可能だろうか」と不安でしたが、実際受けてみると先生方も私たち学生にわかりやすいように教えてくださり、中国語力と同時に中国事情について知見を得ることができました。

最後になりましたが、この研修を企画・運営をして下った南京・東京両大学の先生方、１班の授業を担当してくださった李先生、王先生、素敵な交流会を企画してくださった南京大の学生の皆さん、たくさんの刺激を与えてくれた１班のメンバー、皆さんに感謝申し上げたいとおもいます。

4.4「真夏の東京から、南京へ」

浅野皓生

新型コロナウイルスの影響で、今年度の南京研修もオンライン開催を余儀なくされた。直接南京に行きたかったという思いが無いとは言えない。しかしそれでも、開催前の予想・期待以上に、とても充実した三週間だった。

まずは午前中（日本時間9時～13時）に行われた中国語の授業について述べたい。午前中一コマ目は李先生担当の会話の授業だった。テキストをベースにしながら、グループワークや作文課題、中国の伝統文化に関する映像の内容要約など、様々な形で中国語を学ぶことできた。こうした多彩な授業内容の中で特に印象に残っているのは、発音に関する指導である。第一週目の最終日、[-ing]の発音が標準的でないという指摘を受けたのだ。中国語を学び始めて約一年半、「発音はもう大丈夫だな」と慢心気味だったが、李先生からの「ダメ出し」を受け、発音の難しさと重要性を再認識することができた。

午前中二コマ目は王先生担当の読解の授業だった。王先生の話すスピードはとても速く、最初の内はほとんど聞き取ることができずに打ちひしがれていたが、徐々に耳が慣れてゆき、最後の方は大方の内容を把握することができるようになった。王先生の講義は情報量がとても多く、一つの単語を学ぶにあたっても、その単語の類義語や対義語、コロケーションなどを詳しく教えて頂いた。とりわけ印象に残っているのは性差別に関する作文課題である。王先生が提示した6つの論点は難解であるとともに単語もハイレベルで、正直なところとても大変な課題だったが、「性別役割規範」「ジェンダー」といった内容を表現する中～上級の語句を身に着けることができたのみならず、中国における性差別問題についても知識を得ることができた。とてもいい学習体験だったと思う。

次に午後に行われる様々な活動について記す。まずは南京大学の学生との交流会である。南京大学の学生の皆さんは交流会にあたって入念に準備をした上で、私たちを温かく迎えてくださった。ミニゲームはもちろん、趣味や恋愛など「ナウい」話題について皆で話したりでき、本当

に楽しかった。その一方、自分のスピーキング/リスニング能力の未熟さを痛感させられる時間でもあった。南京大学の皆さんの中には日本語がとても上手な方もいて、学習意欲を大いに掻き立てられた。

中国語講座についても同様のことが言える。どの授業も極めて興味深く、とりわけ第一週目の中国の聴覚障害者に関する授業の最後で先生が述べられていた「必要なのは彼らへの同情では決してなく、全く新たな世界に触れることの喜びと感動を噛みしめることだ」という言葉に強く心を動かされた。その一方で理解できなかった部分も多く、自身のリスニング能力の低さを痛感した。

太極拳に関して言えば、やはり生の指導を受けたかったという思いが強い。もちろん楽しんで体を動かすことができたけれども、先生の気迫を肌で感じながら、太極拳という文化に親しみたかった。

さて、ここからは南京研修全体についての感想を書いていきたい。やはりまずは、ここまでに何度も触れてきたところだが、自分の中国語力のつたなさを実感したことを述べなければならない。語学を習得することがいかに難しいか、改めて思い知らされた。ただ、だからといってやる気が無くなったというわけではない。むしろ卓越した能力を持つ同級生たちの姿を見て、学習意欲は強く深く刺激された。中国語学習も2年目に入り、南京研修前は正直なところ「中だるみ」の時期に差し掛かっていたと思う。しかし研修を終えた今は、心新たに、南京研修で学んだことを復習しながら、腰を据えて中国語に取り組みたいと考えるようになった。これが南京研修に参加してよかったと思う最大の理由だ。

オンライン開催のメリットについても少しだけ述べておきたい。もちろん直接南京に行って研修を受けることがベストだとは思うが、オンラインにはオンラインなりの長所がある。僕にとって、オンライン開催の最大のメリットは、夜に予定を入れることができることだった。そのおかげで、研修と並行して週に2〜3回、読書会に参加することができたのだ。もし南京に行っていたとしたら、こう上手く両立できなかっただろう（もちろん同級生たちと楽しい時間を過ごしていたに違いないが）。

最後になるが、このような貴重な提供してくださった東京大学・南京大学の先生方、そして共に支え合い学んだ同学们に、感謝の念を記しておきたい。常日頃からお世話になっている東京大学の鄧芳先生、李彦銘先生、授業を担当してくださった南京大学の王大莹先生、李宇辰先生、

全体運営をして頂いた阮艳先生、中国語講座・太極拳を担当してくださった先生方、楽しいひと時をくれた南京大学の学生の皆さん、そして東京大学の同学们（特に《小苹果》を一緒に歌ってくれた加藤同学）、本当にありがとうございました！

南京大学鼓楼キャンパス　南京大学HPより

4.5「次への一歩」

川戸健太竜

今回の南京研修を受けた目的としては、中国語の継続的な学習とネイティヴの中国語話者との交流にあった。毎日4時間の通常の授業は正直なところ大変な部分も多かったが、新しい中国語の語法の知識や語彙力の補強は勿論のこと、今までの学習内容の復習もでき、非常に満足のいく内容だった。課題に関しても、丁度いい量だったので、オンラインでもストレスなく毎日学習することができた。

次に、南京大学の学生との交流についてだが、今のレベルで自由に交流するのはかなり厳しかった。きちんと準備して臨めば、もう少し上手くいったかもしれないが、個人的にそこまで時間を取ることができなかったので仕方ないと感じている。太極拳と中国語での授業に関しても同じような印象である。実際に南京に行った場合だと、自然とインプットやアウトプットができるので、その分をオンラインで如何に補うのかが今回の南京研修の課題であったのかと個人的に感じている。

（南京大学逸夫館。撮影：王文欣）

4.6「参加しなければ得られないもの」

小久保龍之介

参加前は中国語のみを使った授業や午後のイベントについて行けるのか不安が大きかったが、教授の指導は丁寧でわかりやすく、午後のイベントも南京大学側が様々な工夫を凝らしてくださったおかげであっという間の三週間を過ごすことができた。印象的なのは会話の授業だった。ほぼ毎日宿題として決められた課題を録音して提出し、翌日の授業でフィードバックをしていただく形式は、生きた中国語を学び自分の間違いを改善するのにうってつけで、初めは自分の中国語を見つめるのが嫌だった私も次第に慣れて楽しくなっていった。ミスを直接指摘されその場で直していだたける分、学んだものが自分の中に吸収されていく実感は大きかった。交流をした南京大学の学生たちは、われわれがなかなか自分たちの思っていることを表現できなくても辛抱強く聞いてくれ、チャットを使ってコミュニケーションの手助けをしてくれたため、積極的なやりとりを通じた文化交流の貴重な機会を得ることができた。終わってみればこの研修は、予想以上に中国語学習への動力となってくれたと思う。自分に足りていないところを教えてくれただけでなく、いつか中国語で円滑なコミュニケーションが取れるようになりたいという思いをより一層強くする手助けをしてくれた。この研修を支えてくださったすべての人に感謝したい。

4.7「南京研修の感想」

小林 透子

南京研修に参加しようと決めたのは、大学での約1年半の中国語の学習成果を一種完成させることができると考えたからです。研修前は自分の中国語力がある程度のラインまでは達成されていると過信しており、それをどれだけ発揮できるかと言うことに問題があると思い込んでいました。しかし、実際に授業に参加してみると、自分がいかに話すことができないか、いかに聞くことができないか、と言うことを痛いほど思い知らされました。クラスが少人数であり多く話す機会が与えられたこと、授業が全て中国語で行われたことに加え、南京大学生との交流や中国語での講演など「生の」中国語に触れたことを通じて自分の弱点を客観的に見つめ直せたと思います。オンラインでの開催となったことで南京の空気を肌で感じることは出来ませんでしたが、その一方で落ち着いて予習・復習を行うことができ、授業中の発言のハードルも本来より低くなっていると言う印象を受けました。

その一方で、やはり講座や南京大学生徒の交流の際は自分の中国語能力の及ばないところが大きく、不完全燃焼で終わってしまったと感じています。中国語能力の多少の欠如は仕方ありませんが、このような場合でも失敗を恐れずもっと発言や質問をするべきだったと少し後悔しています。

南京研修を一つのイベントとして捉えるのではなく、今後の中国語学習のステップアップとして捉え、自分の中で新たな目標を設定することに大きな意義があるのではないかと考えました。

4.8「感覚怎么样？」

加藤雅生

まず中国語そのものに関しての二点の振り返りから始め、続いて少し異なる観点からこの三週間とそれによって自分が感じたことを綴って締めくくる。

中国語に関してその一。なんといっても、リスニングが飛躍的な進歩を遂げた。あれは今でも有り有りと思い出せるのだが、最初に南京大学の学生と交流をした時、正直向こうが何を言ってるのか殆ど理解することができず、自分は終始うんともすんとも言えぬ状態で固まっており、悔しいというよりも自分自身に呆れてしまったことがあった。しかし、やはり語学は量と量をこなすことによる慣れである。毎日生きた中国語に触れていると、自然と耳が慣れてくるし、自分が聞き取れなかった単語を随時メモし適宜見返すことで、会話の中に頻繁に用いられる語句がわかってくるし、自分が聞き取れる語彙も徐々に増えてくる。そのお陰もあってか、中国経済の講義では教授の話を8割方理解することが出来たし（あの講義に限っては先方が私たち向けにやさしい語彙で、ゆっくりとした速さでお話ししてくださったというのもあろうが）、最後の交流会ではゲームの司会を務め、ゲーム中に南京大学の学生たちが言ったことが冗談であると認識して共に笑うことも出来るようになった。無論未だ全ての話を聞き取れるようになったわけではないし、難しい語彙が出てきたり日常会話レベルの速さで話を聞くと耳と頭がついていけなくなってしまうが、このサマースクール中に自らの成長を感じることが出来たのは励みになったし、「やればできるじゃん俺」、という自信に繋がった。

中国語に関してその二。もっと中国語を勉強したい、と思えた。それは「しなければいけないな」、という義務感でもあり、「したいなあ」、という好奇心でもある。相手の話すことがある程度聞き取れるようになったからこそ、電子辞書で単語を調べるよりも間髪入れずに理解できるようになりたいし、辿々しくも話せるようになってきたからこ

そ、様々な分野における難しい単語を勉強してより深い議論ができるようになりたいのである。加えて、自分の理解度が一段階上がったことで、母語話者が選ぶ言葉遣いや表現を通じてその人の出力した意図の片鱗を垣間見ることができたためである。具体的に説明する必要がありそうだ。私が中国語を勉強しようと思った理由の一つに、中国語が中国人にとって第一言語だから、ということがある。何を当たり前な、と思うかもしれない。私は大学に入ってから中国人留学生の友達が数人でき、オンライン上の学生会議を通じて中国出身の人々と交流する機会も幾度かあったが、その際に用いるのは日本語ないしは英語であった。この二つは彼らにとっては第二言語であることが殆どであり、頭の中で先行する母語から形を変えて出力されたものに過ぎない、といったある種の限界を私は感じ得ない（他方私が日本語を母語としている時点で、中国語が話せるようになってもあまり変わらないのではないか、との指摘があろうが、それへの反論は一旦保留）。したがって、私が中国語を話せるようになれば、彼らが話すことをなんの媒介も経ずになるべく新鮮な状態でいわば「つかまえる」ことが可能となるであろう、と私は考えるのであって、それが私の目標であり野望なのだ。話を戻すと、先ほど言及したような南京大学の学生が話す言葉、ひいては冗談の中にも、私はその新鮮な出力を僅かながらであれ感じることが出来たと信じている。だからこそ、より大きな部分を「つかまえる」ことができるようになるために一層勉強したい、と思えたし、経験がそう思わせたのである。このサマースクールは私にとってそのような貴重な経験そして動機を与えてくれたのである。

最後に、自分が感じたことを中国語から離れた観点から一つ述べたい。もちろんこれはオンラインでの体験に過ぎず、現地に行ってみればまた違うものとなろう、ということは重々承知している。それでもなお幾分かではあれ、私は「生きた存在として」中国と中国の人たちを観察できたと思う。少し言い方に含みを持たせたつもりである。この三週間でまず私の目に映ったのは、国は違えど趣味の話や恋愛の話で盛り上がる日常的な大学生としての姿、そして、生徒がわからないとそれに寄り添い、正しく答えると褒めてくれる日常的な先生としての姿である。このような見慣れた姿は、「中国人」という何か自分と対象を分類して隔てるような漠然としたものに、具体的な形を与え、また、彼らは自分た

ちと大して変わらない、と私に感じさせる。一方、そのほかにも私の目にはっきり映ったものがある。ある授業の中で「插手」という単語の説明のために引き合いとして出されたのは（ここでは名前を伏せるが）、A国B国間の問題は二国間で十分解決できるのであり、他のC国が口出しをするのは「插手」である、という具体例であった。その説明は本人にとっては何気無しになされたにせよ、私はそれを聞いた際に、内政不干渉を堅持する国家としての中国とそれに追随する人民の姿をその背後にうっすらと見た。また、学生が紹介してくれた南京大学のキャンパスや先生が紹介してくれた南京の街並みにおいて、あたかもその場所に当然のものとして融け込んでいるような何かを祝う赤い垂れ幕が何度も目に映った。これらの姿を見て、ああこれがやっぱり中国なんだなあ、と私は感じたのであった。それは正負の感情のいずれでもなく、その言葉以上でも以下でもない、感慨というよりも印象である。私の目に映った二つの中国の姿はおそらくどちらも中国の姿をそのまま映したものであり、実際に現地に行けばより多くのことを感じるのであろうが、私にとっては、オンラインにおいてもその姿がよく伝わった。これもサマースクールに参加したことで得られた経験の一つであろう。

長々と書き連ねたが、中国は私にとって知的好奇心の対象であり、その手段として中国語が重要な役割を果たす。この度のサマースクールはその手段としての中国語を磨き実践するための良い機会・契機となり、それのみならず、三週間参加したことで画面越しではあれ私の目に映った中国の姿は非常に印象深いものとなった。この三週間は“非常値得参加”といったところである。関わってくださった先生たち、一緒に参加した同学たちをはじめとする人々に感謝する。

4.9「三週間での急成長」

松村実紗

南京大学での留学を通して、中国語学習の意欲をあげることができ、上達も最大限にできたと思います。1日目、授業はいきなり中国語で始まりました。私はほとんど理解ができず、聞き取れたのは“非常好”と“作业”だけでした(笑)でも、1週間経つとよく使う単語を覚えてきたので授業が理解できるようになり、質問する時も単語で無理矢理伝えるのではなく文章で聞けるようになりました。授業と宿題に追われて3週間はあっという間に過ぎて行きました。でも、この3週間は決して辛いものではなく、もっと中国語ができるようになりたいという気持ちで、毎日がとても楽しく充実したものでした。これは、質の高い先生のおかげだと思います。南京大学の先生はとても明るく、私の学習意欲を最大限に引き出してくれました。

4.10「南京研修で得られた学び」

周友佳

中国語サマースクールでは、中国語の授業と南京大学の学生との交流などがあり、多くのことを学ぶことができました。

まず、中国語の授業では、似ている単語の細かい違いや単語や文法の応用例などまでとても丁寧に解説してくださり、とても分かりやすかったです。また、中国の文化に関する内容も説明してくださったので、中国の文化に対する理解も深まったと思います。

次に、南京大学の学生との交流では、とても楽しく自由に交流することができました。特にゲームをすることは楽しかったです。また、南京大学やその周辺について、詳しく説明してくださったので、とても勉強になりました。

そして、太極拳の授業では、一つ一つの動きを先生がとても丁寧に教えてくださり、とても面白かったです。太極拳の動きは、非常に奥深く、多くの動きに体を守る意味などがあるということを知りました。幼い頃に、中国で見た太極拳を自分で実際にすることができて、とても嬉しかったです。

さらに、中国語の講座では、中国の聴覚障害者、中国経済や南京の歴史、文化などのテーマについて講演いただき、非常に勉強になりました。8月12日の講座では、中国における聴覚障害者の生活について様々な観点から説明して頂き、日中の違いや中国の取り組みについて知ることができました。また、8月19日の講座では、中国経済において重要な要素を丁寧に説明してくださいました。8月26日の講座では、南京という都市について全面的に説明してくださり、南京について理解が深まりました。

このように、今回のサマースクールでは、非常に充実した楽しい時間を過ごすことができました。中国語サマースクールで学んだことを生かして、これからも中国語を勉強し続けたいと思います。

4.11「三週間を振り返って」

揚原 聖智

● 参加にあたって

僕は、両親が中国出身なこともあり、中国人の親戚との関係も深かったため、子供の頃から 中国に良い印象をもっていました。第二外国語は中国語を選択し、ネイティブとコミュニケーションを取れるレベルまで自分の語学力を高めたいと考えていました。そのため、この中国語サマースクールは僕にとってうってつけの授業でした。昨年の 5 月頃に UTAS のシ ラバスをぼんやりと眺めていた時にふとこの授業を見つけ、2 年生になったら絶対に取ろう と思っていました。当時は、来年の夏にはコロナも収束して南京に旅行に行けるのではないかと楽観視していましたが、実際に 2 年生になっても依然としてコロナは猛威を振るっており、サマースクールもオンライン開催となってしまいました。少し残念に思いましたが、 それでもこんな貴重な体験をできる機会を逃すのはもったいないと思い、応募しました。

● 午前の授業

1 日 4 時間の 15 日に渡る授業は、とても疲れるものでしたが、僕たちの中国語力を明確に向上させてくれました。ほぼ毎日午後も予定が埋まっており、特に僕は週三で夜に家庭教師 があったため、なかなか忙しく、毎日出される課題をこなすのはかなり大変でした。しかし、 振り返ってみると、南京大学の先生による密度の濃い授業を沢山受けられた事は、とても幸せな経験だったと思います。朝から晩まで中国語と触れ合っていたこともあり、語学力は思わず独り言が中国語で出てしまうくらい身につきました。また、ペアワークを通して学生間 の交流も深まり、そのおかげで時には愚痴を言い合いながら、時には教え合いながら、楽しんでサマースクールを過ごすことが出来ました。

● 午後の活動

南京大学の学生との交流会は毎回楽しみにしていることの一つでした。彼らが企画する回 はとても密度が濃く、真剣に準備に取り組んでくれたことがよく伝わりました。僕たちの拙い中国語を理解しようとしてくれる姿勢は、とてもあたたかく、おかげで物怖じすることなく話すこと

ができました。僕たちの準備回は、往々にして準備不足でしたが、彼らはそれで も楽しんでくれたり、たくさん質問をして間を繋いでくれたりしました。異なる文化で育った同じ世代どうしの交流はとても刺激的で印象深かったです。太極拳の授業は、オンライン 開催が難しい中、先生方や学生が僕たちが見やすいようにカメラのアングルを何度も変えてくださり、とても熱意を感じました。太極拳はやってみるとなかなか難しく、結局僅かし か出来るようになりませんでしたが、みんなで体を動かしてひとつの事を学ぶのは久しぶりで、懐かしい気持ちになりました。南京大学の先生方による 3 回の講義は、先生方がゆっくりとわかりやすい中国語で話してくださったり、見やすいスライドを用いて説明してく ださったりしましたが、それでも僕が理解出来たのは 5~6 割でした。ただ、その程度の理 解でも、とても面白い内容ということはよくわかりました。今までは中国語の新しいことを勉強してきましたが、これらの講義では中国語で新しいことを勉強したため、完全に理解で きた訳では無いですが、自分自身の成長を感じました。とても有意義な経験をすることが出来ました。

4.12「楽しく学んだ3週間」

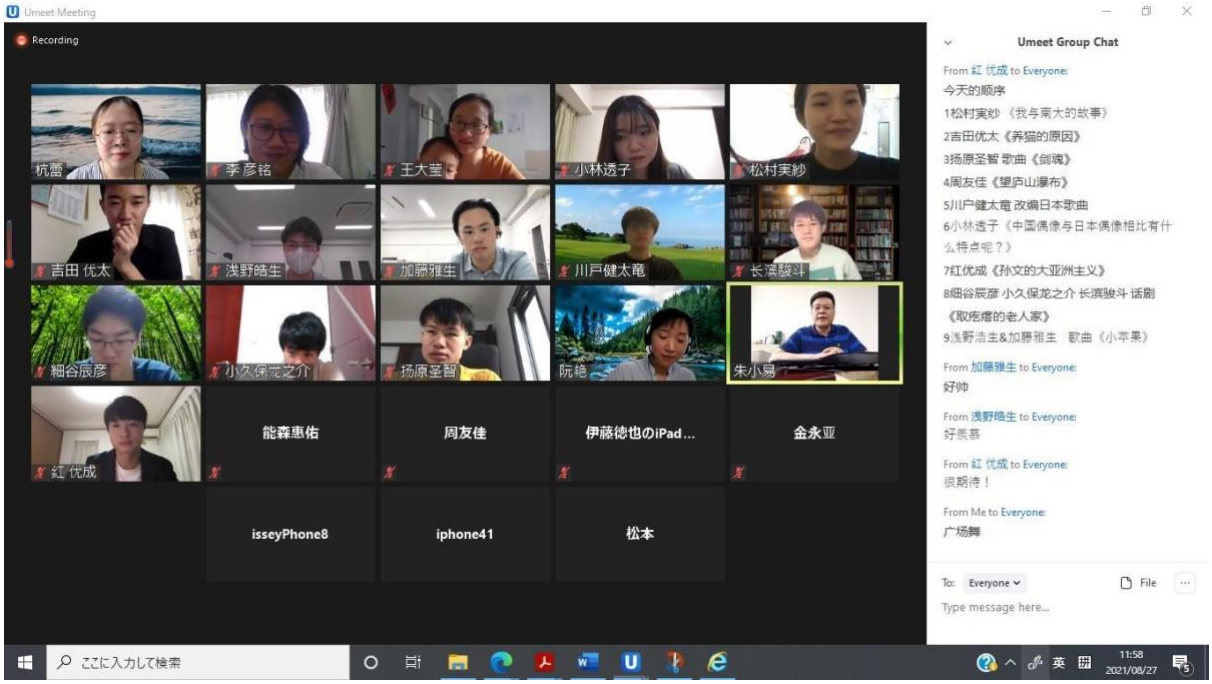
細谷辰彦

午前中の中国語の授業では、教科書を用いつつ、先生方が丁寧に説明をしてくださいました。文法事項や例文の説明、中国文化の解説など盛りだくさんの内容でした。また、気軽に質問のできる環境で、先生方が親身に対応してくださいました。集中的な学習によって、語学力が大きく成長したことを実感しています。

午後のプログラムでは、南京大学の学生との交流、中国に関する授業、太極拳の授業を通して、中国文化に触れる有意義な時間を過ごすことができました。特に、南京大学の学生との交流では、勉強の大変さや、休日の過ごし方といった話題で盛り上がり、同世代ならではの様々な共通点を見つけることができました。

あっという間の3週間でしたが、自分を大きく成長させることができました。このサマースクールで得られた経験を今後の学習に活かしていきたいです。

「结业式&汉语秀」の様子



太極拳で体を動かす

（撮影：厉静泽）

5. 反省会

オンライン反省会記録

伊藤徳也：おはようございます。今回は反省会ではありますが、自分を反省する会ではありません。来年度以降のサマースクールのために、今年のサマースクールは、参加した学生にとって、本当のところどうだったのかということを、私たち企画側が聞かせもらうための会です。この南京サマースクールという東大の中国語学習者のための企画を、今後も有益なものとして続けていくために、皆さんにサマースクールの内実を振り返って欲しいんですね。そしてこのサマースクールを経験した学生が中心になって、東大の中国語学習者のつながりが毎年広がっていけばいいなと思っています。

感想文の中には、自分に自信がないようなコメントがありましたが、自分のスキルは足りないと自覚したとしても、だからこそ、もっと頑張ろう、と思えるのなら大丈夫です。それは将来のスキルの上達を約束するものであって、たとえテストの点数が低くても、まだ表に現れない点数をすでに獲得しているようなものだからです。中国語をもっと勉強したいと素直に心から思ったのなら、もうそれは最高です。

よくしてくれた南京大学の先生に「忖度」する部分はあると思います。人間関係において「忖度」は必ずしも悪いことではないんですが、今日の反省会においては、本当のことを率直に話して欲しいと思います。そういう反省こそが、このサマースクールをよりよいものにしていくと思います。

鄧芳：ありがとうございます。先生がいるので、言いにくいこともあるのではないかとは思うのですが、ご意見とかご提案とか、友達の雑談みたいな感じでやってもらえればいいかと思います。

加藤：ではまず、他の参加者の感想を読んで私が聞いてみたいと思ったことを各自に聞いてまわりたいと思います。最初に吉田くんからお話を聞いていきたいと思います。吉田くんの感想の中で、自然体で授業を受けられた、とかそして中国の方と中国語で会話ができることの嬉しさ、

という話があったと思うんですけど、この二点について吉田くんに具体的に共有していただきたいと思います。

吉田：自然体に受けられたっていうのは、先生方はみなさん優しいとことか、クラスメートのおかげでもあると思います。質問を受け入れる体制みたいながあって、気が張ってしまうこともなく、心地よく学習を効率良くできたなっていう感じがしました。クラスメートの大切さみたいなところは皆さんが書いてくれたように良いところなのかなと思います。学校の授業内で話していって、実際に通用しているかわからなかったところがあったなかで、生の中国語話者に通じるか通じないかが明確になって、自分の話したことが通じていると感じたのが革命的だなと思いました！感覚的に嬉しかったですね。

加藤：ありがとうございます。話が通じるという点について、大学で第二外国語として学んでいる時点では言語は私たちにとって単なる音や文字からなる記号でしかありませんが、相手に自分の意思が伝わることによって、勉強しているものが初めて活きてきた感覚っていうのは自分もそう思いました。では、クラスの雰囲気というところで2班の揚原くんはどうでしたか？

揚原：そうだな、特に口語の授業がそうだったんだけど、発表が多くて教科書どおりに進まなかったところは駒場の2外の授業と大きく違ったかな。

加藤：僕たちも発表の機会が多かったなあっていう風に思っていて、一方的じゃなかったのは良かったのかなって思います。では、次に紅くんお願いします。

紅：僕も授業には満足していて、それよりもむしろクラスの雰囲気、人との交流が貴重だったなって思っていますね。オンライン授業だけでは交流があんまできない中で、でも、今回は同じクラスメートとも南京大学の学生ともすごく交流の機会が多かったかなって思います。今年からTLPに入ったんですけど、冗談を言えるような仲間が見つかったのがと

ても嬉しかったですね。南京大学の学生については、もてなしたいという気持ちがひしひしと伝わってきて、本当にそれが嬉しくて、主催者が東大側に切り替わった時は手を抜かんとこって思いましたね。

加藤：ありがとうございます。本当に南京大学の学生はプロかってぐらい交流会のためにスライドとか準備してきてくれましたよね。じゃあ、クラスの雰囲気ってところで、2班の細谷くんおねがいしてもいいですか？

細谷：クラスの雰囲気だと、発表が多くてブレイクアウトで別れてその時に話すみたいなのが多くて、あと課題の準備でも結構生徒たち同士で話す機会が多かったです。普通の授業でも、先生方は質問を本当に歓迎してくれたので、空気感としてはすごく良かったと思います。

加藤：ありがとうございます。グループワークについては良かったですよね、来年もあればいいのかなって思います。紅くんがキャンパス紹介をバーチャルで体験したっていう感想について書いてたので、そこについてもお願いします。

紅：ニュースでオンライン修学旅行を体験した生徒達っていう画像を見て、誰が楽しいねんって思っていたけど、いざ自分がオンラインキャンパスツアーに参加してみると、たしかにオンラインだけど、景色を見せてあげようという気持ちだけでなく、体験させてあげようという気持ちが本当に嬉しかった。

加藤：なるほど。僕としては、景色とかっていうのはYoutubeとかで誰でも見れると思うんですけど、南京大学の学生たちの場合は紹介したいという気持ちがよく伝わり、オンラインの限界はあるにせよ、それが全く悪いわけではないかなって思いましたね。

加藤：次、僕の感想になっちゃうんですけど、中国人の母国語である中国語で話すことができて、英語で中国人に比べて直接的に相手が何を言いたいのか理解することができましたね。あと、例えば、南京大の学生

が冗談を言う際に面白さとかを感じれたが面白かったです。あと、キャンパス内のあちこちに赤い垂れ幕とかがあったのも中国なんだなって感じで印象深かったですね。

浅野：そうですよね。普通にキャンパス内にそう言うのがあるのを見た時に、価値判断抜きにして文化の違いを感じるんだよね。新鮮に中国と日本違うんだなという感覚、自分の意図しない感じで国の違い文化の違いっていうのが面白かったんですよね。

加藤：次、小林さんのところ、自分が紹介しますね。今後の中国語学習のステップアップにつながり、新たな目標を設定するのに繋がった、とのことです。新たな目標っていうところで川戸くん何かありますか？

川戸：僕の感想も交えて話すと、これからの課題としては、今回実際に中国に行けなかった分のアウトプットをどう補うかっていうところになるのかなと思います。

加藤：確かに、オンラインだとインプットに偏りがちだと思うんですけど、どっちかっていうとオンライン授業の中ではアウトプットが多かったと感じていて、発表が多くて自由度が高かった分、アウトプットの量が多かったのかなと個人的には感じています。じゃあ次、浅野君の感想共有お願いできますかね？

浅野：特に南京大の学生との交流で、若者っぽいことを喋れたっていうことがすごく面白かったですね。授業とかだと真面目なことだとか、与えられた議題だとかを話すんですけど、自分の趣味について頑張って伝えるっていうのははじめての経験でしたね。

加藤：それは、すごい納得できますね。自分が話していることが伝わると、自分の言語が活きているんだなっていう感覚にもつながりますしね。他に、浅野くんは、オンライン開催の最大のメリットとして夜に予定を入れることができて、研修会中でも読書会に参加することができたっていうのを書いていましたね。

浅野：南京に行くことでの中国語の学びを失ってしまうのは微妙だったんですけど、自分のやりたいことができる南京研修以外の勉強もできるというのはすごく良かったです。対面とは違う時間の使い方ができるのがオンラインのメリットでしたね。

加藤：ありがとうございます。次に周さんの感想に移るんですけど、太極拳についてどうでしたか？

周：太極拳を小さい時に見たことしかなかったんですけど、はじめて教わってみて楽しかったですね。

加藤：他の方、太極拳についてはどうでした？

小久保：正直、太極拳は中国語だと内容は難しいし、何言っているのかどんな動きするのかを理解するのは難しかったですね。

加藤：確かにそうですね。対面だとできる手とり足取りの授業ができなかったのがオンラインの難しさかなっていうところで、正直午後のプログラムで一番きつかったですね...

鄧：なるほど、今年からオンラインでも運動するために太極拳も入れてみたんですけど、他の皆さんの意見も気になりますね。

浅野：個人的には、続けなくてもありかなと思っていて、オンラインだと全身を映すのが難しくて、来年以降やるのは難しいのかなと思います。

川戸：僕も浅野君と同じ意見で、違う理由を挙げるとしたら、もう少し休みを増やしても良かったのかなって感じですかね。

吉田：僕も同意で、楽しかったけど、他の中国語の文化の体験もいれればいいのかなって思って、太極拳ばっかりやるよりかはもっとバラエティに富んでも良かったのかなっていう感じです。

松村：週に2時間3回は長くて、もっと短い時間だといいのかなって思いましたね。

長濱：僕もきついって感じていて、改善点としては、文化も学ぶのなら一回目からすぐに太極拳やるっていうのよりは、もっと太極拳の裏側的なところを知りたかったかなと思い、一回目に歴史とかの太極拳講座っていうのがあっても面白いのかなって思います。

揚原：正直そこまで楽しくなかった…。先生のこだわりが強くて、1つの動作を何回も何回も繰り返しやった結果、少ししか動きを学べなかったから、初心者からしたら難しい上に達成感もあんまりなかったように思うな。

加藤：皆さん、ありがとうございます。これを来年以降活かしてくれればと思います。
では、次川戸くんお願いします。オンライン留学で自分で如何に補うかっていうところを詳しくお願いします。

川戸：えーと、それがオンラインだと少し難しいかなっていうところについてなんですけど、国内にいると中国語だけに集中したくてもどうしても他の予定が入ってしまう　というのがあり、それをキャンセルして集中するしかアウトプットを増やす方法がないのかなと思いました。

紅：それについてですが、教科書を使って勉強すればいいのかなと思うんですけど、強制力なかったらやらないと思うので、友達と予定を合わせて無理やり勉強せざるを得ない状況を作り出すのがいいのかなと思います。

浅野：僕は二人とはちょっと違って、ある種の諦めみたいなのがあって、南京に行った場合の経験なんてできないと割り切ってしまって、オンラインのいいところも引き出していくような態度を取ればいいのかなって思います。

加藤：なるほど。皆さんありがとうございます。では、次松村さんお願いします。意欲をあげられたっていうのがあったんですけど、これについて詳しく教えてくれますか？

松村：クラスが少人数で、中国語のレベルが同じなので、先生も質問の受け入れ体制があって、本当に質問がしやすかったですね。だから、積極的に授業を受けることができました。

加藤：ありがとうございます。次に細谷君お願いします。同世代の中国の方と話せたのが良かったっていうのについて教えてくださいますか？あと、大きく成長できた部分についても教えてくれますか？

細谷：国籍が異なるけれど同じ年代だし、交流会では同世代ならではの共通の話題で盛り上がり、話しやすかったです。また、3週間継続して中国語を勉強することで、会話での反応速度とか自分の成長をちゃんと実感できたことがいい経験でした。

加藤：ありがとうございます。確かに3週間は長かったですけど、そのおかげで目に見える形で成長できたのかなと思います。次は小久保くんの感想ですね。「初めは自分の中国語を見つめるのが嫌だった私も次第に慣れて楽しくなっていった」というのは面白い感想だと思ったのですが、この部分について共有していただけますか？

小久保：口語の宿題ではほぼ毎回、自分の言葉で録音したものを提出するのですが、それが全体の前でフィードバックされます。文法も発音もボロボロで、否が応でもそれが正しくなるまで、先生の前で何度も直さなければいけないんです。でも途中からは、間違えてもいい、間違えても自分の母語じゃないから仕方ない、という気持ちで、失敗を恐れなく

なりました。そういう意味では、大胆に行けるようになったかなと思います。

加藤：ありがとうございます。それが少人数の授業の一つの良さですね。同じ班として、長浜くん、どうでした？

長浜：そうですね。普通の東大の授業だと日本語で授業が行われることも多く、何か分からないことがあっても中国語ではなくて日本語で聞けばいいや、という「逃げ」みたいなものがあったんですが、やはり先生方は中国の方なので、中国語で話さなければいけないわけです。なので小久保くんと同じように割りきって、文法の正しさよりも「伝わればいいや」という気持ちで授業に臨みました。このように「中国語で考える」ことができたことで、一つ自分の殻を割ることができたかな、と思っています。

加藤：なるほど。中国語しか通じず、中国語を話さざるをえない環境に身を置くことで、自分の間違いを恐れなくなるということですね。東大の先生方も日本語で聞かれても何も反応しない、と決めれば、生徒の方も間違いを恐れなくなるかもしれません（笑）。次に長浜くんから感想をお聞きしたいと思います。オンラインながらも交流がかなり充実していたということで、南京研修を評価するようなコメントだったと思うのですが、ここについて共有していただきますか？

長浜：他の方もおっしゃっていましたが、特に僕は法学部に進学予定なので、オンライン授業と言うと、受講者が多くて質問もしづらく、つながりを感じない、というイメージが強かったんです。でも今回は少人数授業ということもあり、自分の意見も言いやすく、特に口語の授業ではビデオをオンにして受けるということも多かったので、「一緒に学んでいる」という感覚を得られました。またブレイクアウトルームなどで実際に中国語を使ってみたり、グループワークを授業後に一緒にこなしたりと、実際の教室で授業を受ける感覚にちょっと近づいたかなという気がしました。こういう感じなら対面授業と同じように受けられるかな、と思いました。

加藤：ありがとうございます。ビデオがオンだと他の人の表情も見ることができますし、グループワークなどで話す場面もとても多かったという点では、少人数授業の良さが感じられたかな、と思います。また来年続けていくうえでも、一グループ五、六人だと丁度よいのかな、とも思いました。では最後に揚原くんの感想を見ていきましょう。面白いなと思ったのは、「朝から晩まで中国語と触れ合っていたこともあり、思わず独り言が中国語で出てしまうくらいまで中国語力が伸びた」という部分です。この辺りについて話していただけないでしょうか。

揚原：それほど中国語の独り言が出たわけではないのですが（笑）、ちょっとしたときにポロっと中国語を話してしまう、ということはありました。これはそれほど珍しいことでもないと思っていて、ずっと同じ言語に触れていると、こういうこともあると思うんです。その言語ができるかできないかに関わらず、口癖のように喋ってしまう感じで。いっぱい勉強したなと、実感しましたね。

加藤：浅野くんも日常でかなり中国語を使ったりしてると思うんですけども、今回の南京研修を経て、日常の独り言の語彙が増えた、というようなことはありました？

浅野：そうですね、“好的”と言うようになりました。先生がよく“好的”と言っていたので、その影響で。他の中国語の言葉も、使う頻度は増えた気がします（笑）。

加藤：そうですね。先生の口癖の真似をしたり、ということは結構あったと思うので、これも一つのインプットとアウトプットかなと個人的には感じました。さて、揚原くんにもう一つお聞きしますが、「異なる文化で育った同じ世代どうしの興隆はとても刺激で印象深かった」と書かれていたと思うのですが、どの部分が特に刺激的だったかについて教えていただきますでしょうか。

揚原：中国語母語話者の同世代の方々と交流する機会はあまりないので、そういう意味で刺激的だったなと思いました。僕には中国人の親戚がおり、中国語を話す機会が全くないわけではないので、むしろ他の人達よりは中国語を話していると思うんですけれど、同世代と話すとなると全然内容も違いますし、大学の話や色々な生活の話とかを同じ目線で話せたことは、とても新鮮だなと思いました。

加藤：ありがとうございます。世代が近いからこそ同じ目線で話せるというのが、大学生と直接交流することの良さかな、と思います。では次に全体として今後改善した方がいいところ、問題点について、一人一人、忖度なしで話してもらいたいと思います。じゃあ吉田くんからお願いしていいですか？

吉田：はい。僕からは三点ほどあって、一つはまず個人的なことなので皆さんの意見を聞きたいんですけど、個人的には教科書は電子版の方が嬉しいという部分が実はあります。僕はiPadを持っているのですが、iPadの専用のアプリを使えば、書き込みをあとから調べることもできて便利なんですよね。昨年は電子版だったということなので、個人的には電子版の方が嬉しかったな、という感じです。でもこれは人によって違う部分だとも思います。iPadを 持ってない人にとっては使いづらいと思うので、バランスはとても難しいと思いますが、電子版の良さもあるということをお伝えしたかった、というのが一点目です。二点目について、これは仕方がないことなのですが、先生方の授業や太極拳などでネットの調子が悪いことが多かったな、と思います。授業でもネットが不安定になって中断することがかなり多く、その時間がもったいなかったと思うところもあるので、改善は難しいかもしれませんが、もっと安定すればより快適に授業を受けられるかな、と思いました。ここがオンライン受講の最大のネックかもしれません。三点目はかなり実際的なところです。毎回午後にあった中国語の講義についでなのですが、そのうち、後の二回は休憩がなかったと思います。僕はぶっ通しで中国語を聞いていると、まあ日本語でもそうなのですが、疲れてしまって集中力が切れてしまうことがあるんですよね。そういう意味では、休憩とかがあると嬉しかったなと、個人的には思います。

加藤：ありがとうございます。吉田くんからは教科書は電子版の方が良かったのではないかという点、先生方のネットワークが不安定だった点、講義に休憩が欲しかったという点について指摘があったと思いますが、鄧芳先生、どうしましょうか。

鄧：そうですね、来年からは教科書を送ってもらった上で、電子版でも配布するという形で、両方あった方がいいかなと思います。

李彦銘：少し割り込ませていただきますが、教科書について、二班の方はどう感じました？　担当の先生から、皆さんにとって少し難しかったという一言があったような気がしますけど、皆さんとしてはどう感じましたか？そこが少し気になりますので、是非言ってみて下さい。

加藤：では川戸くんからお願いします。

川戸：確かに知らない部分もあったのですが、既知の内容と新しい内容のバランスが良かったので、難しすぎたり簡単すぎたりするということは無かったのかな、という気がします。

加藤：ありがとうございます。では揚原くん、お願いします。

揚原：僕は逆に簡単だなと思っていました。正直なところ、本文は中学生が学ぶ英文というような感じだったかな。外国語の長文を勉強する際に内容が簡素になってしまうのは仕方がないことだとは思います。ですが、文法事項などの学ぶことは多くても、内容で学ぶことが少ないとちょっともったいないかなとも思うので、難しいとは思いますが、例えば大学入試の英文のように、読んで面白い内容とかの教科書だったら良かったかな。だけど、本文は簡単でもグループワークなどは難しくて、授業自体の難易度は問題ないかなと思っています。

加藤：ありがとうございます。小久保くんはいかがでしたか？

小久保：そうですね。間違えたりすることもありましたが、内容としては難しいと思わなかったので、むしろもうちょっと練習問題を解く時間が多かったり、もうちょっと練習問題を増やしてくれた方が良かったな、と思います。本文の内容自体はそれほど難しいとは思いませんでした。

加藤：ありがとうございます。では長浜くん、いかがでしたか。

長浜：僕は（教科書は）良かったかな、と思います。特に教科書の構成が良かったかなと。総合課の方が文法、口語の方が文化、という感じで、と棲み分けができていて、学ぶことも多かったかなと思いました。ただ改めて考えてみると、駒場で受けていたインテンシブの授業の教科書などと比べても、難易度があまり変わらなかったかもしれません。教科書の文章の内容に関しても、やはり得るものは少なかったかな、という部分はあります。

加藤：ありがとうございます。文法事項は充実していたが、内容として薄かったかなという意見でしたね。一班の方々はどうでしょう。吉田くん、いかがですか？

吉田：個人的には難易度はちょうどよかったです。インプットが足りなかったという部分がこれまでの中国語学習の反省点なのですが、南京研修の教科書はインプットとアウトプットのバランスがとてもよかったと思います。また特に授業の後半からは、先生方も教科書をたくさん使うというよりは、他の活動に力を入れて頂いたので、授業事態のバランスもよかったかな、と。ともあれ、教科書の難易度は適切だったと個人的には思います。

加藤：ありがとうございます。浅野くん、いかがですか？

浅野：僕は二つの教科書、どちらも良かったと思います。吉田くんも指摘してくれたと思うのですが、特に授業後半、先生方は重要な部分をピックアップして解説してくれた後、より発展的な内容に進む、という授

業構成だったので、教科書自体の難易度を気にすることはありませんでした。また個人的には、読解の教科書がとてもよかったと思います。単語の説明のところにコロケーションもたくさん書かれており、とても勉強しやすかったです。

加藤：ありがとうございます。周さんはどうですか？

周：私も教科書二冊ともよかったと思います。基礎的なところから少し応用的なところまであったので。

加藤：ありがとうございます。紅くん、いかがでしょう。

紅：教科書の難易度については僕も不満がありません。ただ、先ほどの揚原くんの意見には賛成です。南京サマースクールに参加するような人って、日常会話の中国語ができればいいという程度で満足する人たちではなく、最終的な目標としては学術的なトピックをスムーズに中国語で話せることだと思います。なので、文章の内容自体を長くした方がより面白かったかな、と思います。また、精読（読解）の教科書についてですが、単語の解説を先生がかなり時間を取ってるやってたんですけど、単語の解説は自分でできるところだと思うので、それよりかは本文に即した読解などをやって頂いた方が、学ぶところも多く、効率もよかったのではないかなと思いました。

加藤：そうですね。精読の教科書の方は単語の説明を先生が詳しくして下さって、ここに載ってないことについても結構教えていただいたので、読解力というよりは単語の知識の方が増えたかな、という印象です。また口語の方は、どちらかと言えば教科書に沿って学ぶというよりも、先生が大事なところをピックアップして、実際に使ってみようという部分が多かったので、そこが良かったです。内容的には口語の方はかなり簡単だったかなって思っていて、文法事項は確かに多かったのですが、普段の授業で用いていた「漢語縦横」くらいのレベルでもよかったのかなと。実際に使った口語の教科書は、予習を忘れていってもその場で何とかなるくらい簡単だったので。

李：ぜひお時間がある人は「漢語縦横」を個人的に勉強してみてくださいね。私もとても面白い教科書だと思います。

加藤：では紅くん、全体として今後改善した方が良い点や問題点について、お話していただいてもいいでしょうか。

紅：はい。一点だけあるとすれば、何時から授業が始まり、何時に終わるのか、何時から交流会が始まるのか、といったスケジュールを早めに共有して頂けると助かるな、と思いました。別にその年のものでなくても、参考として前年のスケジュールを早めに公開していただけると、それこそ川戸くんたちが言ってくれたように、予定をたてるときの参考になると思うので、そうしてくれた方がありがたいかな、と。

加藤：ありがとうございます。次は僕の番なのですが、僕自身は改善した方がいい点について、あまり思いつかなかったです。「オンラインだから」という、ある種の超然とした態度だったというのもありますし。強いて言えば、ネットワークをもう少し安定させて頂ければ、よりスムーズに授業を受けられたかなと思いますね。次に浅野くん、お願いします。

浅野：僕もネットが不安定だったというのは改善して欲しいポイントかなと思っています。
その上で一点だけ述べるとすれば、三週目の交流会の企画・準備は東大側の学生がやってくださいという連絡が、直前にメールや微信で来たんですよね。確か第三週の月曜日と金曜日の交流会は東大生の主催でお願いします、という連絡が来たのが金曜日の交流会前だったと思っていて、その金曜日の交流会の最後に南京大の学生さんたちが「月曜日からは東大さんが準備してくださるのよね」ということをおっしゃっていて、少し困惑しました。結果としては、限られた時間の中でも頑張っていい準備ができたと思いますが、もう少し前に知らせて頂けれていれば、もう少し時間をかけて、スライドを充実させたり内容を吟味したり

と、丁寧に用意できたかな、とも思うので、もう少し早く知らせていただけたら嬉しかったかな、と思います。

加藤：そうですね。かなり直前でしたが、しっかり準備できたかなと思います。

李：来年は（南京大の）阮先生と、より緊密に連携・連絡していきたいと思います。交流会自体について言えば、一班の方の交流会に参加させてもらったのですが、とても楽しそうで、先生がいない分、自分の言いたいことを、自分の言いたいタイミングで話せていたようなので、とてもよかったかな、と。東大の授業ではどうしても単位の兼ね合いもでてきてしまいますし、こういう形で話すということはなかなか難しいので、改めて交流会を含め、サマースクールの意味を感じました。

加藤：では周さん、全体として今後改善する点や問題点について、お話頂いてもいいでしょうか。

周：私は結構満足してるので、あまり改善した方がいい点は思いつかないです。

加藤：分かりました。では川戸くん、どうでしょう。

川戸：今回の南京サマースクールでは、午前中が（日本時間の）九時から（午後）一時、午後が三時から五時、というのが基本的なタイムテーブルだったと思いますが、個人的には予定がとても入れにくいな、と思いました。オンラインで日本にいるからこそ、様々な予定が入ってきます。しかし、昼休みの二時間は予定を入れるには短すぎますし、五時以降に予定を入れるのも難しいと思います。また、午後が休みの日が一日しかない（注：実際には南京市ロックダウンの影響で現地中高生との交流会がキャンセルになったため、二日）のもかなり厳しかったです。オンラインだからこその兼ね合いのようなものが少し難しかったかな、というのが個人的な感想です。皆さんの意見をお聞きしたいです。

加藤：ありがとうございます。午後休みの日を増やして欲しいという点は確かにそうだな、と思いました。一方、授業時間が中途半端だというご指摘についてですが、日本時間の午前9時は中国時間の午前8時ということで非常に早いので、ここは動かせないと思うんですけど、午後の時間は動かせるのかなと思いました。それこそオンラインでの参加なので、例えば（日本時間の）四時から六時とか、午後の活動を後ろに倒すことはできるのかな、と。

川戸：オンライン受講なので、わざわざ昼に授業を入れずとも、例えば夜に授業もできるわけですよね。

加藤：どうでしょう。先生方も夜勤になってしまうので、その辺り問題があるかもしれません。僕は南京研修に夏を捧げるつもりだったので（笑）、昼の二時間の休憩はちょうど良かったですし、五時以降も一人で遊んだり出来るから良かったかな、と。川戸くんからは夜の方に授業を入れたら面白いんじゃないか、というご指摘がありましたが、他の方、どうでしょう。

浅野：僕の個人の感想ですが、確かに昼の時間が中途半端という川戸くんの指摘は正しいと思っています。一方、そのおかげで夜に予定を入れることが可能だったということについても述べておきたいと思います。大学生の予定は夜に入ることも多いので、その点では両立が容易でした。ただ、インターンに行くとか、友達と遊びに行くみたいなことを考えると、やはり昼の2時間では足りないかな、とも思いますね。僕にはあまり友達がいなかったのでそういう悩みがなかったわけですけれども（笑）

紅：ここにいっぱいいるよ、友達は（笑）

浅野：泣かせるんじゃないよ（笑）

加藤：昼の時間が中途半端という声も強いですが、僕はそうでもないかなと思っています。もし休憩が一時間だけだとしたら、昼食を済ませた

らすぐに授業再開という形になってしまうので、集中力が切れてしまうかな、と。二時間ぐらいがやはりちょうどいいのかなと個人的には思います。また、夜に予定が入ることが多いというのは本当にその通りだな、と思っていて、僕も夜に授業が入ってしまうと、友達と飲みに行ったり、ご飯行ったりすることができなくなってしまうと思うので、結局のところ、タイムテーブルは今年の感じでちょうどいいのかな、と。来年、受講者の方から意見が出れば、改めて検討してみてもいいかもしれません。川戸くん、ありがとうございました。では細谷くん、続けてお願いします。

細谷：僕は特に不満がないですね。

加藤：分かりました。では小久保くんはいかがでしょう？

小久保：僕もあまり不満はないです。強いて言うなら、中国語講座の動画を各回頂けると後で見やすくて便利でした。

加藤：なるほど。講演の講座をアップロードして頂ければ、後で見返すことができるから良いのではないかという提案でした。次に長浜くん、お願いします。

長浜：太極拳以外にそれほど不満はありませんでした。強いて言うならば、交流会でもブレイクアウトに分けて、半々とか、1/3ずつとかにした方が、少人数で話ができていいかなとも思ったので、一回くらいそうしてみてもよかったかな、と。

加藤：そうですね。確かに一班と二班に分かれる際に既にブレイクアウト機能を使っていたので、そこからさらに別れることができなかったという面はありますね。次からは、最初から一班用のルームと二班用のルームを別に作って、その中でブレイクアウトルーム機能を使う、といった形で、工夫はできるかもしれません。では揚原くん、お願いします。

揚原：一番の不満はオンライン開催だったことなんですけど（笑）、でも仕方ないので。本当に残念でしたが、それ以外は特に不満はありませんでした。さっきの時間の問題につけたすとすれば、僕は週三で家庭教師に行っているんですが、それも全て夜七時くらいからなので、ちょうど五時くらいに終わるのはとても助かりました。

加藤：対面で開催できなかったという点はごもっともですね（笑）、ありがとうございます。では最後に、今回の自分自身の反省点、今後、今回の経験をどのように活かしていきたいかについて、一人一人にお聞きしていきたいと思います。吉田くんからお願いします。

吉田：目指すべき中国語のレベルが分かったというのが一つ、もう一つは、今までは中国語を一人で勉強してきたんですけど、周りに同じように頑張っている人たちがいるということを知れたことですね。そう知れただけで、すごくモチベーションになったので、こういう部分は活かしていきたいですね。今回の自分自身の反省点について言えば、今までインプットが全く足りなかったな、と強く思いました。特に四字熟語（“成语”）とか全然これまで知らなくて、この授業を通して、「本当にこんなに使うんだ」と衝撃的でしたし、使っていると格好いいじゃないですか（笑）、ともあれ、この辺りはもっと早くから準備すべきだったと思います。

鄧：ちなみに、吉田さんの翻訳、すごくよくできていました。副院長先生の最初のスピーチは原稿がなかったので、吉田さんは全て中国語を聞き取ってから日本語に訳されたわけです。

吉田：分からない所はワードのディクテーション機能を使いました（笑）

鄧：それでも、素晴らしかったです。

吉田：いえいえ。それでも翻訳をするにあたっても、成長を感じたのは事実です。初めに副院長先生のスピーチを聞いたときには何を言ってい

るのだろうと思っていたのですが、今回聞きなおしてみると「こういうことを言っていたんだ」と、かなり聞き取れる部分も多かったので、貴重な機会をありがとうございました、という気持ちです。

加藤：ありがとうございます。目指すべきレベルが分かったというのは大きいですよね。勉強しているのは一人じゃない、まわりにも共に切磋琢磨する学徒がいる、ということに気付けたことも大切だと思います。では続いて紅くん、どうでしょう。

紅：僕も二つありまして、一つ目が正しい発音を色々教わったので、正しい北京话を話していきたいと思います。というのも、僕は昔福建に住んでいたことがあるので南の訛りがあって、ここにいないから言うんですけど、加藤雅生っていう男にいじられるので（笑）、より標準的な中国語を話せるように鍛えたいな、と思っています。あと今回せっかくできた人の輪を活かして、何かしてみたいなっていうのをぼんやりと考えています。なので今回の経験を生かして、日々訓練という感じでやっていきたいです。

加藤：ありがとうございます。今回できたネットワークを今後活かすことも大事だと思いますし、中国国内における普通語の位置づけに関してはよく分からない部分もあるのですが、標準の発音を学べたことはよかったかなと思います。紅くんの発音には南方的口音（注：南の方の訛り）があってちょっと面白いです（笑）

李：ちょっと割り込みますが、さっき話に上がっていた太極拳の先生は南京訛りがかなり強いので、皆さんにとって聞き取りが特に難しかったのだと思います。現地で開催するなら、現地の人のしゃべる中国語、普通語ではない中国語に触れられるいい経験でもあると思います。その点、南京大の学生の皆さんの発音はかなり標準的でしたね。

加藤：ありがとうございます。次は僕自身の反省点と今後についてです。南京大の学生と交流する際に一番感じたのが、自分が話したいことを伝えられないということが結構あって、それは語彙の問題がとても大

きいのかな、と思いました。「日本語のこれこれって中国語でなんて言うんだろう」と思って、辞書を使って調べたりとかして、そういう手間があると交流もスムーズにできないし。自分の語彙がその少ないと、言いたいこと、言えることって限られてくると思うので。今後は中国語の勉強を継続して行っていき、もっと自分のことを表現できるように、それこそ今回の経験を今後の中国語学習のモチベーションにしていけたらな、と思っています。次に浅野くん、お願いしていいですかね？

浅野：既に吉田くんとか紅くんが言ってくれた部分なんですが、やはりインプットが足りないこと、発音を標準化しなければいけないことについては本当にその通りだと思います。中国語学習も二年目に入って、発音を軽視していた部分もあったんですけど、（口語の）李先生に完膚なきまでに叩きのめされまして（笑）、反省しました。収穫としては、当然学習意欲の向上というのが一つあるんですけど、もう一つは、「これぐらいの語学力で一応なんとなく通じるんだな」っていう部分でした。ちゃんと喋れるわけでもないし、文法も滅茶苦茶で単語を羅列するだけみたいな感じで話すこともあるんですけど、それでもなんとか三週間乗り切れたので、自信につながりましたね。「意外と頑張れば何とかなるんだな」っていう実感を得られたことは大きかったです。反省点としてはやはり、インプットが足りなかったことですね。一応、南京研修に向けて予習はしたんですけど、あまりその予習が実るのこともなかったので。南京研修で重要になるのは、中国語を話す際の瞬発力だったと思うんですけど、僕が復習したのは接続詞についてだったので、もう少し適切な予習をしておけば、もっと身になった部分はあるのかな、と思います。

加藤：ありがとうございます。そうですね、「このくらいのレベルでも通じるんだ」っていう成功体験が自分の自信になるという部分は、本当にそうだと思います。僕自身、本当に中国語で交流ができるのだろうか、という不安はあったんですけど、たどたどしくても通じる、というのは自信につながりますし、それこそ来年参加される人たちには、あまり心配しないで是非参加してみてくださいと伝えたいですね。では次に、川戸くん、お願いします。

川戸：反省としては、皆さんがインプットとか予習について述べていたと思うんですが、むしろ僕はアウトプットや復習が足りなかったな、と思っています。授業を聞くだけでは中国語を使えるようにはならないじゃないですか。復習が大事と皆さんも理解してると思うんですけど、僕は南京サマースクールの勉強と他の用事とを同時並行的にやっていたことによって、復習に時間を割くことができなかった感があって、ここは反省点かな、と思っています。今後に活かしたいこととしては、僕自身の実感として、自分がダラダラと中国語を勉強しすぎかな、という思いがあるんですよね。一年半ちょくちょく勉強していくよりも、一気に勉強する方が、一気に話せるようになるし、身になると思います。「いつまで中国語を勉強してるんだろうな」という思いは最近かなり強いんですけど、何とか次の冬休みなど、大学期間中に中国に行って、一気に中国語を勉強する機会を作ろうという風に思いました。

加藤：ありがとうございます。復習やアウトプットをより重視すべきだったという話があったと思うんですが、アウトプットに関しては、発表の機会や宿題など様々なものがあったように感じられるのですが、そうした活動をより増やすべきだということですか？

川戸：アウトプットという言い方がよくなかったかもしれません。復習が足りなかった、ということです。それこそ実際に中国に行っていたとしたらもっと復習していたと思うので。その点、やや中途半端に終わってしまった感があるというのが自分の反省ですね。

加藤：ありがとうございます。次に細谷くん、お願いします。

細谷：やはり反省としては、南京大学の学生との交流の時に東大側が用意する企画を、もう少し頑張りたかったというところでしょうか。今後の活かし方としては、自分の中国語も満足いく程度通じましたし、かなり成長できたと思うので、このまま学習を続けたいと考えています。

加藤：ありがとうございます。東大生側がもう少し入念に用意したかったというお話でしたが、時間をもう少しかけて準備するべきだったということですか？

細谷：その通りです。南京大学の学生さんたちは、おもてなしの心をもって準備・企画をしてくれたのですが、自分達はやはり準備時間も短かったので。

加藤：ありがとうございます。次に小久保くん、お願いしていいですか？

小久保：先ほど川戸くんも指摘してくれたのですが、三週間がっつり中国語を勉強したことで、「だらだら中国語を勉強しすぎだな」と切実に感じました。あまり長い期間勉強しても仕方がないな、という学びを糧に、中国語をまとまった時間、しっかりと勉強して、一定のレベルまであげたいな、と考えています。

加藤：それ、どうやったらできますかね（笑）

小久保：「1日1時間」のような継続も大切だと思うんですが、そういう継続とは別に、例えば週に一日オンラインの中国語会話レッスンを受けるなど、「読む中国語」「聞く中国語」だけじゃなくて、「使う中国語」を練習する機会を作ることが大切かな、とは思います。

加藤：ありがとうございます。継続とは別に集中的な中国語学習機会を意識的に設けていくことも重要ではないか、というお話でした。では長浜くん、お願いします。

長浜：東大での授業では文法が中心で、そこばかりに関心が向かいがちだったのですが、南京大の学生さんたちと交流する中で、発音は聞き取れてもそれを漢字に変換できず、何を言ってるのか分からないということが多々ありました。そういう意味では、今まで「漢字頼り」になりすぎていたな、という点に気付けたので、もう少しリスニングの練習を行

って、発音と漢字とをしっかりと結びつけられるしたいな、と思いました。得られた経験としては、今述べたように自分の「漢字頼り」に気付けたことが一点あります。また、交流会で知り合った方もいるので、今回得た教訓を活かして勉強し、いずれ実際に南京に行って中国語を使ってみたいな、という目標ができたので、そういう面でも貴重な経験だったと思います。

加藤：ありがとうございます。視覚的情報として漢字を頼りがちであることは、やはり否めないと思います。例えば南京大学の学生が話してることを文章で送ってきてくれたとしたら、私たちは全部理解できると思うんですけど、やはり音声情報として入ってくると、その一部が抜け落ちてしまうんですよね。それこそ授業の中のディクテーションの小テストとかを頑張ってやっていけば、克服できる部分かな、と思います。自発的な取り組みも当然ながら大事ですけれども。では最後に揚原くん、お願いしていいですか？

揚原：僕は今回のサマースクールを、中国語を勉強するというよりかは、中国語を使ういい機会として捉えていました。実際、中国語を沢山「浴びる」ことができましたし、ちゃんと取り組むことができたので、特に反省などはなかったんですけど、皆さんのインプットの話や復習・予習の話を聞いていると、とても意識が高いな、感じたので、そこが今、反省になりましたね。もう少し意識を高くして参加すればよかったな、と。得られたものとしては、中国の文化や南京大学の学生さんたちとの交流は勿論ですが、東大内での親交の輪が広がったことも大きかったです。これまで東大内では、高校同期や同じクラスの同級生としか交流がなかったので、文系の、しかもTLPの方々と知り合うことができて嬉しかったです。南京サマースクールがなかったら絶対に知り合えなかったと思うので、良い人脈が得られたかなと思います。英語で分からないことがあったら、いつか質問しようかなと思います。すごく貴重な体験になりました。

加藤：東大内のコミュニティとして機能してるというところも大事ですよね。ありがとうございます。それでは、活動報告会は以上にしたいと

思います。皆様長い間お疲れ様でした。それぞれ他の人の話を聞いて色々と思うところもあったと思うので、忘れないうちにメモをしたり、目標を立てたりして、行動に移していただければなと思います！

（南京大学学生との交流会の写真　　撮影：王玨婷）

おわりに

極少人数オンライン中国語サマースクール

伊藤徳也

昨年度はコロナ禍の下、初めてオンラインによる実施に踏み切った。むろん不備、限界はあったが、一定の成果を上げたと思う。大学、学校というものは、毎年新入生が来、彼らは毎年所定のカリキュラムを履修し、それぞれが貴重な若い時間を過ごす。東大の中国語教育も同じである。大学側は毎年原則同じ教育フォーマットを準備しなければならない。今年もコロナ禍が続き、日本では、まさにこのサマースクールの初日であった8月9日には日本全国の新規感染者数が1万2千人を超える状態だった。中国ではそれまでに徹底したゼロ・コロナ対策を実施して効果を上げていたが、出入国は相変わらず厳格に管理されており（日本も）、南京に学生を渡航させる選択肢は今年もなかった。そして今年も二度目のオンラインによるサマースクールを実施することになった。サマースクール実施先の南京大学海外教育学院の責任者朱副院長には、以上のような事情を理解していただき、また、東大と南京大学との交流関係の堅持に改めて力強い支持を示していただいた。

蓋を開けてみれば、20名募集のところ、たったの13名しか応募がなかった。追加募集しても誰一人応募してこなかった。結局参加者は12名止まりで私たち（鄧芳先生、李彦銘先生、私等東大TLP教員）は大いに落胆した。しかし、「災い転じて福となす」ではないだろうが、結果として少人数ならではの良さもあった。

コロナ禍が激しい状態にあった昨年春、サマースクール実施についてどうするか悩んでいた時、オンラインでも魅力あるサマースクールにするために、浮いた渡航費・宿泊費を利用してクラス編成を極少人数にするアイデアを思いついた。そこで連絡がついた当時の2年生にアンケートをして、極少人数クラスによるサマースクールの充実化をどう思うか聞いたことがある。結果は、否定的だった。ほとんどの学生が、クラス

の極少人数化に魅力を感じないと答えた。しかし、今年のサマースクールは、極少人数方式にもやはり利点があったことを教えてくれている。むろん極少人数クラスが逆に負担になったり不愉快な人間関係を作ることになったりするリスクはあるだろうし、そうなったら貴重な3週間が水の泡どころか、最悪の時間になってしまう。そうしたことを考えて尻込みした学生が多かったのだろう。現実的に、南京側のマンパワーの都合で20名を極少人数クラスに分けて教育するのは実施不可能だということをあとで知らされたのだが、それはともかく、最初から腹を括っていた今年の参加者は、極少人数のサマースクールを否応なく体験することになった。

当報告書の中の印象記や反省会記録の中からは、少人数であったことに利点があったことがはっきりとうかがえる。昨年度はなかった最終日の中国語発表会（“汉语秀”）の様子は、今年の参加者間の仲の良さ、中国語に対する親しみ、中国語学習への意欲を十分感じさせるものだった。また、南京大学生との交流をサマースクール後も継続して行こうという学生組織も立ち上げられたと聞く。サマースクールがこうした主体的な学生活動に結びつくのは非常に喜ばしいことだ。東大生は、ただ単に知識を頭に詰め込んで試験でいい点数をとる「受験秀才」のままでいて欲しくない。知識は足りずとも、スキルは今ひとつであろうとも、話すこと、行動すること、実際に他者一人ひとりと交流することだ。何もしなければ、知識もスキルも、試験の点数をとるのに役立つだけで、死蔵されるのみだ。東大生は、その豊富な知識や聡明な智慧を活かすために、みな勇敢に、主体的な行動への第一歩を踏み出すべきだと思う（すでに踏み出している人はさらに前進）。今年のサマースクールの参加者は、全員ではないにしても、そうした主体的な行動への第一歩をはっきりと踏み出した。もしかしたら、極少人数であったことだけが、こうした結果を導いたわけではないかもしれない。しかし、今後も毎年続けていく南京中国語サマースクールを、さらに本当に有益で充実したものにするための一つのヒントを、今年のサマースクールの経験は指し示してくれたように私は思う。

2021年11月2日

2021年度 南京中国語サマースクール（国際研修）

協力
南京大学海外教育学院

担当教員
鄧　　芳　　大学総合教育研究センター・特任准教授
李　彦銘　　大学総合教育研究センター・特任講師

責任教員
伊藤　徳也　大学院総合文化研究科・教養学部 教授

主催
東京大学大学院総合文化研究科・教養学部付属グローバルコミュニケーション研究センター・トライリンガルプログラム（TLP）中国語
東京大学・教養教育高度化機構国際連携部門リベラルアーツ・プログラム(LAP)

本研修は、株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいて実施されました。

2021年度 南京中国語サマースクール報告書

2021 年11月初版印刷

編集　鄧 芳

発行　東京大学リベラルアーツ・プログラム(LAP)

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 TEL 03-5465-7671

URL:http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/ E-mail:admin @ lap.c.u-tokyo.ac.jp

表紙写真:南京大学北大楼（撮影・南京大学学生　王　文欣　）